

武德編年集成甲乙曾補從宣正全九月

和書門	
二七九三八	類
一八七函	架
三册	冊

內閣文庫	
二七九三八	和書
一八七函	架
三册	冊

番號	和 27938
冊數	3 (1)
函號	150 7

150-7



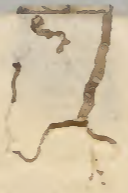
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





武備臨年每成甲
 一贈御書之宜
 正丹大
 慶長十九年
 公入新年
 本國
 社

明治十三年購求

△

本城武及豊直
江戸御城也

慶長十九年
正月大
朔日御譜代
諸役人諸番

甲寅年
大小名
肥近ノ士番頭物

武德編年集成甲乙増補卷之壹

岡村近貞撰

公ノ新年賀又畢行
神君武陽ニ御起
年故台徳公大猷
且國君大納言忠長
神君ノ御對顔下
且國君大納言忠長
神君ノ御對顔下
且國君大納言忠長
神君ノ御對顔下

侍家御馬代白銀千兩ヲ献セラレ大澤少
将基宿是ヲ披露ス御祝ノ御齒固献盃ノ
規式例ノ如シ御陪膳ハ金森左兵衛重義
喜号見長五郎重勝内藤掃部助御西ハ松
平右衛門大夫正綱御加ハ水野隼人正忠
清小云云
五月六日
五月五日
五月四日
五月三日
五月二日
五月一日

此御事頭御名代御礼者
慶長十五庚辰年正月廿
御名代伊東掃部助治時
駿府下向給之入

○二日外様ノ大小名以下本城へ出仕ノ
輩例ノ如シ昨日登營ノ族今日西丸出仕
豊臣右大臣殿名代薄田隼人正兼相御大
刀御馬代献ニ拜謁ヲ遂ル
○今夜例ノ謡曲始着坐ノ次第左松平和
泉守象乘松平甲斐守忠良松平丹波守康
岳松平下總守忠明加藤左馬助喜明小笠
原左衛門佐信之右ハ松平山城守忠国小
笠原兵部大輔秀政松平外記忠實松平河
波守定行森堂和泉守高虎牧野駿河守忠

成... 武陽本丸... 輦西丸... 登城...
○三日武陽本丸へ昨日、輦西丸へ登城
又

○三日武陽本丸へ昨日、輦西丸へ登城
又

○^{五日}武湯本城ニ於テ 神君ノ御饗應アリ
台徳公能大猷公躬ヲ陪膳ヲ成シ五ノ猿
樂アリ国君高砦百萬ヲ舞踏セラル
大御臺所御覽故ニ諸士見物ヲ聽サレス
ト云々

○三日流島本城ハ和島ニ華西ノ入道也

○六日神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス

○五日 神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス
○四日 神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス
○三日 神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス
○二日 神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス
○一日 神官僧侶西丸ニ登ル 九本城出ハス

○七日 神君葛西ノ邑ハ放鷹トメ渡御
今日ヨリ當月十八日迄下總東金等ニ放
鷹シ玉フ

○六日 神君葛西ノ邑ニ...

○十七日 京都...

○十七日 大久保相摸寺忠隣洛陽坂ノ卯
糞宗伴天連ヲ禁獄ニ尚長寄入ニ渡海メ
彼卯徒ヲ可糺斬首命セテ今日入洛ニ
藤堂高流切館ニ任代隱ニ盤狭刃割テ京
尹ノ被官切支丹寺ニ向ハ玉ル処西
京四条西寺花主入任侶ハ豫龍以鎮西ニ走
リケレ京西京新切支丹寺ノ燒拜ヒ臨祭
ノ寺小施ノ類火ヲ藏セテ其有較時燒奔
僧徒ヲ虜トシ畢矣并々其ノ...

注曰...

○主蒲生家ノ驍兵佃亦右衛門ハ當時福島
就正則ニ仕早處伴天連タルニハ嚴科
○注曰此ニハ神君渠
トテカ勇銳ヲ惜ニ以テ暫ク寛宿ノ御沙
○注曰及ヒ主人ヨリ
○注曰未由屢見ヲ加
○注曰此ニハ神君渠
○注曰遂ニ詠ニ言伏テ下
○注曰大ハ八
○注曰神君渠

○注曰十八日
○注曰神君着西ヨリ江城ニ還御
○注曰參駿府ヲ御出興以來今日ニ至テ鷹ノ捉
○注曰此處ノ鶴ハ五羽白鳥ハ羽鴨等若干也鷹
○注曰此ニハ神君渠
○注曰神君着西御放鷹ハ深キ御秘計
○注曰今日羽易山形城主從四位下行侍從兼出
○注曰羽身源朝臣義光ハ廿五歳ニシテ平人
○注曰京最上修理太夫義守ハ子勇將ノ孫ナリ

家臣寒河江肥前守兵衛山家河内兵衛
但馬殉死又義光酷烈不仕一説臣下詞
才信其嫡男修理大夫義康之高野山
赴誓居又八由ヲ諭ニ刺入其路次庄内
領九岡ト云處ハ從士并上半花衛門ヲ遺
シ火炮ヲ以テ義康ヲ打殺サシム其二男
駿河弁家親ハ正天十九辛卯年以來
神君ニ昵近也此ハ是レ以テ家ヲ継ガ
セ度ヲ兼テ願望以テ於テハ一上ニ當リ
或書曰

大坂ノ長臣等諸大名ノ廢于廢家ノ具
父兄ニ恨ル放或ハ亡命落魄ノ驍士
ヲ密ニ扶弔ヲ送り恩撫ヲ施ス最上家
親カ鹿角清水大藏少輔息弥一郎ヲ内
ニ其舅リニ應ス大藏ハ其妹関白秀次
ノ妾ト成文禄四乙未太閤ニ殺サル其
宗根命捨テ秀頼ニ内應ス誠ニ人倫ノ所
爲ニ非ズ
今日豊臣右大臣秀頼大坂城中豊國ノ
今參詣スリ

○廿一日 神君本多佐渡守ヲ召テ大久保
忠隣莫大榭ノ命ヲ不得シテ山口修理
亮重政カ子伊豆守重信ト私ニ婚姻ヲ結
ノ罪ヲ以テ領地ヲ没収シ江加彦根へ謫
セラルルハシト云ク則正信ヲ始メ老臣等
洛陽板倉伊賀守カ方ハ驛次ノ奉書ヲ望
シ此命ヲ忠隣ニ傳フハ申ヲ達シ且忌
障カ居城小田原ニ在ル処ノ士卒奴僕ニ
至ル迄悉ク放過ス衆ニ傳フ云ク
○十六日 林長藤堂高直ト云ク

○廿一日 安藤對馬守重信ヲ上使トシ本
多出雲守忠朝並高力丸近大夫忠房松平
越中弁定綱牧野忠成淺野妻女正長重ヲ
遺同廿一日シ小田原ノ城郭ヲ請取シメ本丸ヲハ
當三月ヨリ松平丹波守在番タルハニ城
郭廣大ニ規補正シカラス二三ノ曲輪
惣郭ハ割崩スハ申命セラル
今己ノ刻神君江城ヲ御出陣路次放鷹シ
吾共神奈川旅營ニ御止高直冬以來駿
府ヨリ御馬廻リ小健土悉ク東武ニ召寄

○廿二日 藤澤ノ旅亭ニ著御
○廿一日 吾痛惜此本... 皇北命田... 崇功既... 惟其大... 本道... 昔供奉... 丁日起年... 人及大... 怪... 今度

○廿二日 藤澤ノ旅亭ニ著御
○廿一日 吾痛惜此本... 皇北命田... 崇功既... 惟其大... 本道... 昔供奉... 丁日起年... 人及大... 怪... 今度

○廿三月中原ノ御殿ニ著御
見送卜メ武城ヲ御省達アリ
台徳公御

○廿二日

○廿四日未ノ尅
御所ノ人虎口ヲハ駿府ヨリ
引鏡ノ来来
是ヲ守護ス
神君小田原ノ城ニ着

○廿五日未ノ討 台徳公小田原ノ城二
ノ丸ニ着御本丸ニ於テ 神君ハ御對顔
席堂和泉舟本妻佐渡守伺候御采談アリ
テ安藤治右衛門ヲ監使トシ當城二三ノ
丸ヲ明日ヨリ駁有ノ卒從ヲ以テ急ニ毀
破スヘシ旦明朝此城ヲ御發興アルハキ
ニ依テ拂曉ヨリ西ハ三嶋ヲ浪リ東ハ大
磯平塚ニ至リ衛兵ヲ設ケ暫ク往來ノ旋
容ヲ留ヘキ旨命セラル于時佐渡守此間
寂上出羽舟卒玄之由今日注進アル旨言

上セシカハ東武ニ在勤セシ其子駿河平
泉親ヲ急ニ山形ハ遣入ヘキ旨御談アリ

○廿六日 林香小田原ノ城ニ
○廿七日 林香小田原ノ城ニ
○廿八日 林香小田原ノ城ニ
○廿九日 林香小田原ノ城ニ
○三十日 林香小田原ノ城ニ

○廿七日 神君小田原ヲ登シ箱根山ヲ
 越サセ玉ノ山中五間ニ矢炮ノ卒一人宛
 ヲ置テ守レシノ三島ニ著御此門ノ衛護ハ
 保田甚兵衛則景島孤尤衛門昨日ヨリ是
 ヲ沙汰セシム 台徳公小田原ヨリ武陽
 ニ越カセ玉ノ成瀬豊後身正武ヲ三島ニ
 遺ハサレ佳音ヲ献セラル

○廿八日 神君善徳寺ヲ旅営トセラル

○廿九日 神君...
 〇廿八日 神君...
 〇廿九日 神君...

○廿九日駿府に還入之玉ノ下時尾張參
議義直卿遠江參議頼宜卿川口之橋ニテ
迎へらる

○廿八日 軒窓各少中下 茲言 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

武德編年集成甲乙増補卷之貳

岡村近貞 撰

慶長十九甲寅年

二月小

朔日

大正十一年三月廿九日 武德編年集成甲乙増補卷之貳 岡村近貞 撰 慶長十九甲寅年 二月小 朔日

京都諸司代板倉
伊智守勝重
壬子年正月ヨリ
被命也

○二日洛陽ニ於テ板倉伊智守勝重ハ奉
書到未ニハ大久保忠隣カ寓館ニ至ル折
節忠隣暮ヲ圍テリケルカ從者未テ唯
今勝重カ来ル莫ハ當家配流ノ御使々ル
由真向ヘテル者ヲ告ケルカ忠隣聊勤轉
セズ人暮ノ勝重カ次ニ勝重ニ對面シケ
ル處江州彦根ハ謫居スハ申者御諒ノ趣
傳達ス時洛中人高客等忠隣憤ヲ聞テ
遂ニ申者諷歎ニ資賤ヲ洛外ヘ退ニトメ
大ニ躁動ス忠隣是ヲ聞テ擲ハ登心処ノ

○此九日取有
二月小
癸酉十六日甲寅年
田村 貞良

甲冑兵器綴物以于櫛ヶ所司代ニ渡シテ
ハ洛中忽平均其忠誠ヲ棄テル莫
皆感之抑大久保家代ニ御當家ノ重臣ト
ハ忠功殆良其類ナシ殊ニ忠隣ハ十一歳
ハ秋ヨリ神君ニ咫尺ニ奉リ武略智謀
兼備シ五十二年ハ勲業燦々ト台徳公
ハ輔相ト以テテ世人崇敬他ハ異ナリ
故自然ニ諒鋒ニ隔リ奮得借上ハ汚名ヲ
蒙ル也其叔父治右衛門忠佐ハ創業ノ
銳士トテ駿州沼津二萬石ヲ領シ今ハカ

其子弥八郎去年病死ニ忠佐ニ當春卒去
ク時ニ遺言ノ末分彦九衛門忠教ニ所領
ヲ譲リ玉ハニ莫ク願望多シ妙ニ本家相
模弁左遷ニ及フニ忠佐力跡式没収也
テ本多上野介守藤帯刀ニ沼津ノ壘ヲ
割崩スハキ旨命セテ心旦忠隣ハ嫡子加
賀弁忠常四箇年以前卒去ニ早也其孤
子仙丸ハ歳ニ亡父カ別子取来ニ二万
石ヲ桐續ニ今年漸ク十二歳也其上仙丸
カ母ハ眞平美作年信昌カ娘トテ神君

御外孫女... 故歟二万石... 府六本木ノ別墅... 男石川全殿頭忠總... 家成力嗣子卜成... 東武ニ塾居ス三男右京亮教隆... 幸信ハ召籠ラレ五男存記成亮... 刑部忠政七男主計忠勝... 内忠尚等罷... 居セシムト... 成瀬家記曰...

大久保相易... 痛心... 云其畧曰昔... 又晴愚タリ... 須テ不忠... 政人職ヲ... 不圖虜受... 不身ハ... 十キ實ヲ... 由テ書テ... 遺ス上... 雖諸臣皆...

神君ノ御憤リヲ憚リ且本尋佐渡守父
子カ怒ヲ避テ是ヲ拳達スル者ナリ
成瀨舟人正正成彼歎状ヲ批達ス干
時仁神君是ヲ上覽アリテ御怒ナク忠
憐奢傷ノ罪ハ通シ大凡其逆意ナキ
ハ御疑公散セシ御容貌夕夕衆皆成瀨
カ剛果ニメ忠貞深キ夏ヲ感ス南光坊
天海モ忠憐カ不實ノ罪ニ陥ルヲ憐テ
其紕斷ヲ願フ下雖御許容ナク
台徳公ハ本尋正信益侍リ吐又レ

ハ弥忠憐ヲ憎ミ玉ノ忠憐彦根ノ中村
郷ニ塾居ニシルカ翌年元和元年井伊掃
部頭直孝ハ兄兵部大輔直勝ニ代テ彦
根ヲ領シ或時忠憐ニ向テ責容譏諷ニ
覆ハシ當所ニ駭論ノ夏世拳テ夏ノ何
ノ再往歎訴ナキヤト向忠憐カ曰忠臣
科ナクシテ左遷セラルル莫其例尋ニ皆
天也炎ルヲ強テ申報ルナキハ君上
ハ此ヲ拳ルニ似タリ依テ再三紕斷リ
希ナル者ヲ答テ直孝感涙襟ヲ濡シテ

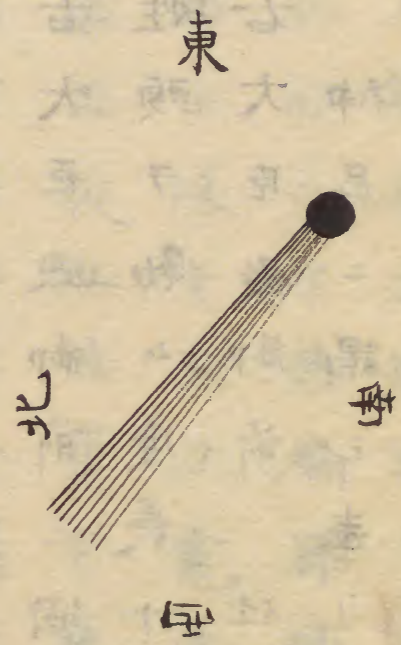
慶長十八年八月廿一日
左大臣幸長卒
三十八

退少忠隣後彦根石ヶ寄下云所
移り藝居又然ルニ虚名漸晴ルニ近カ
リケルニヤ其嫡孫仙九忠任其名ヲ新
十郎ト改メルカ寛永二乙丑恩免ヲ蒙
出仕又從五位下ニ敘シ加賀守ニ任メ
同五年辰六月忠隣疫疾ニ墾ル時ニ勞
而ヨリ久志本式部太輔末リ醫瘡ヲ尽
シ力其功ナリ同廿七日享年七十八歳
ニ没ス加賀守忠任ハ段々恩禄ヲ賜
晚年ニ至ル前唐津城八万石ヲ領ス

○三日朝野但馬守長盛太丰兄紀伊守幸
長没ニ其領地紀伊一圓ヲ賜ル謝礼トメ
参府ニ黄金三千兩疋服二十襲ヲ獻ス

浅野家譜曰
浅野岩松長盛彈正大弼十三歳ノ時ヨ
リ右大臣殿御前ニ伺公ス三十石ヲ賜
小姓頭ヲ勤ム慶長十五庚戌年三月朔
日右大臣殿御前仕シ二條御城ニ至
テ神君ニ謁シ奉リ台徳公ハ仕奉
ル是密左京大夫幸長巖ハ神君ノ御
内慮ニヨル也ト云々

○四日彗星東方ヨリ出ル



朝鮮ノ浪客李文長曰彗星出ル事時節春也東南ヨリ出ル東ハ木ニテ春也西ハ金ニテ秋也金剋木ニシテ相生ニ非ス若東西ニ兵乱起ラハ東方ニ利アラシキカト云々

○五日申ノ刻大坂本城天弁ヨリ黒氣立外ヨリ觀ル処偏ニ煙ノ如シ依之城中城外大ニ騒動ス右大臣殿元相主寤正貞隆命ノ朝鮮ノ浪客李文長ニ焦氏ノ易林ニ據リ占ハシメ所ル処人面九口長舌爲斧劉破珣連收高絶後ト云詞云予必死也又集兵車強朱其貞急敗我教卿云詞云予ハ按ル所大凶ト云右大臣殿驚テ領内陣國ノ大社大寺ニ於テ祈禱セシメテ其羣臣ハ謂ニ及ハス庶民皆曰輦ハト云々

○今日台徳公ノ近臣青山大藏少輔
成并其實矣朝比奈弥太郎兼重權左衛門
森川丹膳正重後後出將大久保兵部郎
忠辰同平助忠當日下部河内守等唐辛
亥十月九日大久保加賀弁忠常相模守忠
三十一年来本去ノ時悔情ヲ忠謀ニ述公未夕
ノニ上意ヲ得又ノ密々本南原ニ往ニ
莫ヲ本尋上野女是ヲ詐天傳志生入其所
領ヲ没収セテ此郵ノ如ク如ク
○止此中使大木天也

○七日神君浪客宇都宮末房ヲ松平虎
之助忠昌越前守直人臣トナシ玉テ城
井弥九衛門ト改ム
宇都宮家譜
人皇十代崇神天皇ノ皇子豊城命東
夷征舞トシテ下向野國ニ居住シ玉
ヒ三年ヲ經テ逆徒悉ク亡シ玉ヒ宇都
宮ニ河内郡四所明神ヲ崇祀ス其後
人皇七十代後冷泉院ノ御宇貞元ノ
逆徒安部貞任宗任調伏ノ為攝政兼丞
公二男栗田関白道兼公ノ後胤大僧正

宗圓近江国石山寺ノ任職タリシヲ宇
 都宮号氣ノ郷ニ下向シ朝敵降伏ノ祈
 念ヲナサシム凶徒七、奥羽静謐ニ及ヒ
 ケレハ下野ノ国主宇都宮檢校日光山
 ノ別當ヲ兼シメ玉フ是宇都宮ノ祖ニ
 シテ其子下野權守宗綱其子宇都宮武
 者所尤衛門尉朝綱ハ右大将家ニ奉仕
 ス源頼朝郷其子弥三郎頼綱ノ後胤左
 衛門尉公綱ハ治部大捕ニ神仕ス武功
 ノ家ニメ未考此後胤也後公綱カ称号
 ヲ略シ城井治部左衛門末房ト号ス

○十四日 上意ニ依テ執事奉行起證文
 ヲ呈

- 一 敬白起請文前書
- 一 奉對 西御所様御後圖儀毛頭不下存支
- 一 雖爲親子見芽奉對 西御所様御爲惡浦
- 一 族并皆所法度葦珍多ク在極下上支
- 一 今度大久保相掬守蒙 御勅氣ノ上以
- 一 未相掬子父子共不通可仕支
- 一 公更批判御是之儀知喜、好之儀も不
- 一 及中紙爲親子見芽無遠怖由負極下上支

一 於評定所批判極遠之時、必應極意通
 一 不依善惡名頭、不相減下中出度
 一 於御前被仰付候儀、善惡無御意、則若
 一 不致他言、餘人中被仰付候儀、兼候是
 一 當人不中出度、他言仕向、浦度
 一 知音為仕中、合一味、仕者入情、形之不及
 一 言上度、御前被仰付候儀、形之不及
 一 皆上意、彼石知音、好意、と、入總仕
 一 向輔支
 一 此衆中、或者皆御法度、或致出、負偏頗、就緒

事惡事、有、中、遂、御、聽、作、御、突、擊、之、上
 何、極、意、了、被、仰、付、候、儀
 右、條、之、於、相、背、者、罰、文、如、常

慶長十九年二月十四日

島田兵四郎
 米津島兵衛
 井上主計頭
 水野監物
 安藤對馬守
 土井大炊頭

酒井備後子
酒井雅樂氏

一、於神宮內...
二、...
三、...
四、...
五、...
六、...
七、...
八、...
九、...
十、...
十一、...
十二、...
十三、...
十四、...
十五、...
十六、...
十七、...
十八、...
十九、...
二十、...
二十一、...
二十二、...
二十三、...
二十四、...
二十五、...
二十六、...
二十七、...
二十八、...
二十九、...
三十、...
三十一、...
三十二、...
三十三、...
三十四、...
三十五、...
三十六、...
三十七、...
三十八、...
三十九、...
四十、...
四十一、...
四十二、...
四十三、...
四十四、...
四十五、...
四十六、...
四十七、...
四十八、...
四十九、...
五十、...

○十五日 神君近臣 夜諾 今宵より免

許セラルル事多ク、十四日、
今日、...
地、...
...
...

○十九日濃羽岩村ノ城主從五位下行和
泉舟源象乘享年四十歳ニ卒ス
今日佐竹右京大夫義宜新羽羽秋田ノ
地ヨリ録ヲ出スニ依テ南籙二百貫ヲ
神君ニ獻ス

○十九日
軒皇並皇ノ御孫今曾孫ノ宗

○廿一日 御使土井大炊頭參
向入社
今日江府市
○十日 紫
今日
○十日 紫
今日
○十日 紫

○廿一日 御使土井大炊頭參
向入社
今日江府市
○十日 紫
今日
○十日 紫

○廿一日 御使土井大炊頭參
向入社
今日江府市
○十日 紫
今日
○十日 紫

○廿二日 米津清右衛門頼勝配易阿易
撫養。於子誅セラル

○廿一日 台勢公、頼如土井入殿

○廿六日 松前茂廣從五位下、叙志摩
守。任不伊豆守茂廣
今日江府市中大火ト云

○朔日 佐野休理大正綱本、
陽城下大火、到院、
幸得山、
○辰 辰其、
○廿五日 廿五日、

○廿七日菅沼左近定芳從五位下。叙之
織部正。任人。

今日新在市中大火
○廿六日
○廿六日

武德編年集成甲乙增補卷之三

慶長十九甲寅年
三月大

○朔日佐野修理大夫正綱本
陽ノ城下大火ノ刻輕忽ニ居城野
辛澤山ヲ發ニ翌日江府ニ蕭ノ
力居城ハ高峻ニ武江ヲ眼前ニ見下
故火災詳ニ相知ルヲ以テ早速出府
由老臣ニ達スル趣ヲ台德公大ニ御

有テ第一何篇ノ夏アリ氏御下知ヲ得ス
ノ在所ヲ殺セサル令法ヲ背クノ罪ヲ祢
正綱ヲ江府ニ留置シ辛澤山ノ城郭ヲ
破却スハ由今日近境ノ諸族ニ命アリ
佐野家譜曰
○佐野小太郎宗綱天正十三乙酉戦死ノ
後北条左京大夫氏政ノ弟右衛門佐氏
忠其家督ナル処ニ同十八庚寅宗綱カ
伯父天徳寺ヲ伯浴陽里谷ニ住ミテ
大カ大尚秀吉公ノ嚮導トシ小田原ニ下

○佐野ノ舊臣ヲ賺シ佐野ノ城地ヲ押領
不焚シ共出塵ノ身タル故詮方ナリ秀
吉公ノ寵臣富田左近將監知信カ二男
ヲ請得テ了伯カ領邑ヲ讓ル是今ノ正
綱也則故宗綱カ娘ヲ以テ正綱カ妻ト
不此處年ヲ歴テ正綱天徳寺ニ不存妻
室ト不伏家法不正焚シ氏忠輝朝臣母
堂ノ甥花井主水ト男色ノ交リ厚ク大
久保石見守ト入魂ナリニユヘ妻王憤
トテ押入居ケルカ石見守没シ

其子氏罪セラルルニ正細カ妻時ヲ得
 ヲリト正細カ遺行ヲ訴ヘ渠ヲ隱居
 ラメ嫡男吉之丞正秀ニ家督ヲ賜ル
 キ旨願望ス処兼テ正細カ折臣大久保
 石見守ト入魂ヲ懼ルセ玉フニ彼累
 代ノ取領ヲ轉シ信品松本五郎替地ヲ
 賜ル人キ旨命セ給ルト云々其旨五
 元御使ト至リ登城ス

○三日江府ヨリ水野監物忠元御使トシ

元御使ト至リ登城ス
 先有斯由之事相奉御使忠元御使ト至リ
 台徳公一歩有御使忠元御使ト至リ
 事ハ江府ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス
 御使忠元御使ト至リ登城ス

○六日兩傳奏廣橋權大納言兼勝卿西三
 條權大納言實條卿在廣橋辨兼賢卿日野辨
 光廣卿四辻宰相季繼卿高倉女將永廣卿
 台德公一品右府卿任叙位記宜旨ヲ
 帶シ江府ニ下向ルル處先以テ駿府ニ至
 テ神君ニ拜謁シ響應ヲ賜リ金地院宗
 傳長老ヲ以テ洛陽五岳ノ長老宿宇ノ徒
 數十人登城ス是所相下向スル處也則乃
 政以德ト云フ題ニ行文ヲ作ラシメ寶樹
 寺華朶ト云フ題ニテ頌ヲ作ラシメ玉ノ

○三日巧亦ト云フト登城入
ト水程望此處ト云フ知ル

神君此後比叡山

宿老正學院僧正

高野山ノ學侶大衆院尋闡院奄室院

興福寺ノ惣持院喜多院河跡院寺東

大寺ノ清涼院大善院智積院ノ觀成

坊長故坊圓福寺其餘淨土宗ノ學也

等ノ各其論議依向ヲ聽セ玉ク止

金銀又宗寺領ヲ任卿寄附セ玉ク故

各其宗向ノ學ヲ勵メ武門ノ繁榮有

希ノ如斯請宗ノ奧秘ヲ説ク事也

○七 処或ハ深ク秘シ述ル莫ナク或ハ其

大概ヲノミ稱スル中ニ天台ノ碩學

南光坊天海ハ洞達ニメ天下ノ主ハ

則喜薩也何ヲカ秘スハキト其奧旨

殘ラヌ説テ血脉ヲ傳ハ奉ルト云々

備ハズ是ノ秘傳ハ昔ハ秘傳ニ

秘傳ニシテ秘傳ニシテ秘傳ニシテ

秘傳ニシテ秘傳ニシテ秘傳ニシテ

秘傳ニシテ秘傳ニシテ秘傳ニシテ

○七日板倉伊賀守羽書到未之耶獲宗ノ
制禁嚴密ナル故當春加賀松平肥前守利
常ヨリ伴天連高山右近友祥入道南坊内
希飛淨守如安等ヲ禁錮メ洛陽へ送ル以
後細川越中守忠興ヨリモ加山直人ヲ
捕ハ遺ス是ヲ始邪徒百七十餘人獄舎ニ
入置山口但馬守雅朝卜番議ニ糾斷ノ罪
決定ノ趣委細ニ注進以依之重テ伺宮權
左衛門伊治ヲ差登セラル間熟計ニテ右
内高山力族ヲ始重科ノ徒男女百餘人

此は... 高山... 伊賀... 羽書... 未之耶... 獲宗ノ... 制禁嚴密ナル... 故當春加賀松平肥前守利... 常ヨリ伴天連高山右近友祥入道南坊内... 希飛淨守如安等ヲ禁錮メ洛陽へ送ル以... 後細川越中守忠興ヨリモ加山直人ヲ... 捕ハ遺ス是ヲ始邪徒百七十餘人獄舎ニ... 入置山口但馬守雅朝卜番議ニ糾斷ノ罪... 決定ノ趣委細ニ注進以依之重テ伺宮權... 左衛門伊治ヲ差登セラル間熟計ニテ右... 内高山力族ヲ始重科ノ徒男女百餘人

慶長七年
二月四日大御殿
御禮元元初市正
同四年 月
京都三在任
織田百全大御殿
是年討つて
有宗元和七年
西曆三月吉
卒年七十

山口間宮相携ハ長崎ハ遺ニ西祥國ハ放
流スハハ殘黨七十余人ヲハ真品津經ノ
外演ニ諱流スハ十旨釣命ノ趣老臣ヨリ
板倉九方ハ奉書ヨ呈以
今日泉品坂政所本車假ニ補セラル柴山
小兵衛正和ヲ本職ニ命セラル中坊左近
除之
○十日所京中買在昨書信本
備禁
○十日所京中買在昨書信本

○十五日越後高田城築今日ヨリ始ル
堀丹後守直寄カ矣伊賀守利直近辛書院
奮頭ヲ勤仕ニ今ハ此ハ太久保相模守忠彦
力媒物ニ依テ森本妻豊後守康重カ輝成
此誤テ此莫上哉ヲ雁ス其神ヲ蒙リ取
領八十五没取也ヲ配陣カ庶子右京亮
教隆主膳幸信武品例城論セラ
書日賀品松平筑前織田南樂齋大野修理亮
右府公成長了リ轉今二年武將ノ器備ル

古大臣發定後
内其外神社傳
修造長七上
り大前請

早久大坂ニ至リ輔佐セラルルハ
當時大坂ニ倉庫ニ收ル所七万石
衛門大夫米穀三万石且高者大ノ
處若干也悉ク利長卿ノ算語ヲ
黄金千枚秀頼公ハ備用セラル武備ノ
ヲ厚クスルキ由也利長其旨ヲ應セ
子利常ヨリ彼藤ヲ駿府ニ獻ス神君
近奉右府日本ノ大社佛閣大畧再與
心譬金銀ヲ畜ル莫山ノ如ク尽ス
仰分心兼テ大坂一度ハ兵ヲ起サ
台

慮ヲ惱シ玉ヒケルカ是ヨリシテ一入雄
謀ヲ運シ玉リト云々
○今日京都板倉伊賀守從士恩田金右衛
門黨類十餘人ヲ催シ罪ヲ犯ス故洛陽伏
見ヲ引直サレ刑戮ニ及フ
○今日佐野修理大夫正綱父子取替ト
ル命ヲ受テ信州松本ハ赴ク其路次ハ瀧
口外記常吉ヲ以テ父子トニ松本江配流
ノ由諭サル

慶長八年七月廿七日
後室神君ノ姫君ナリニカ駿府ニ下向

○廿七日池田三左衛門尉輝政ノ相播磨守
後室神君ノ姫君ナリニカ駿府ニ下向
ニ玉ト先達テ其息左衛門督忠絶ニ備前
國ヲ封セラレ幼稚ノ間ハ舍兄武藏守利
隆ヲ以テ國務ヲ執ル莫是輝政カ訴望ス
ル處也然レ氏利隆ハ忠絶ト異腹工ハ母
堂疑ヲ生シ今白川國勢ヲ忠絶ニ托ラシ
ルニ莫ヲ願ハルニ神君是カ許意至少カ
○今曾古今和謔集ハ秘奥御相傳ハ少カ
冷泉黄門爲滿卿参府林道春カ彼和謔集

三箇ノ大夏ヲ尋ラル道春具ニ言上ス後
日爲滿卿ノ傳ハ奉ルニ等合ス爲滿卿講
述スル夏月ヲ累ヌルト云々

○今月 神君筒井伊賀守定次
家断絶ヲ憐レニ玉ヒ被_レ軍麻五郎定慶同
希六郎度之ヲ召出サレ兩人ニ和易福住
一万石ヲ授ケ筒井家ノ浪客三十六人ニ
二百石宛ヲ賜ハリ是ヲ興力トメ郡山ノ
城ヲ守ラシメ玉フ麻五郎ハ主殿頭麻六
郎ハ紀伊守ト称ス

武徳編年集成甲乙増補卷之四

武徳編年集成甲乙増補卷之四

岡村近貞 補

慶長十九甲寅年

四月大

朔日

○二

西川如見日
 日輪赤クシテ
 隨唐宋元ノ書ニ
 記ニ桓武ノ朝ニ
 夏ヨ載夕リ惣テ
 中部水涵ノ氣日
 輪ノ下ニ疑滞シ
 是ヲ隔テ日光ヲ
 見ルカ故也春未
 朝暮日川出沒尋
 ヲハ紅色也是地
 上ノ涇霧或ハ山
 端ノ霞霧ノ厚キ
 ヲ隔テ見

今月...
 氣身十六甲寅年
 西川如見日
 日輪赤クシテ
 隨唐宋元ノ書ニ
 記ニ桓武ノ朝ニ
 夏ヨ載夕リ惣テ
 中部水涵ノ氣日
 輪ノ下ニ疑滞シ
 是ヲ隔テ日光ヲ
 見ルカ故也春未
 朝暮日川出沒尋
 ヲハ紅色也是地
 上ノ涇霧或ハ山
 端ノ霞霧ノ厚キ
 ヲ隔テ見

故三其形大ニノ色赤ク者也皆溜氣
川所爲タリト云々

申將治心ノ邊ノ林ノ下ニ對テハ是
中ノ池ノ水ノ澄キヨリ

日講亦々々々々々々々々々々々々々々々
日講亦々々々々々々々々々々々々々々々

日講亦々々々々々々々々々々々々々々々
日講亦々々々々々々々々々々々々々々々

○二日

○三日旭ノ色又銅ノ如シ

今日参昴ノ御主高力河内守長次享年二
十三歳ニノ卒ス是ハ土佐守正長力三男

也
今日

今日

今日

○四日

○四日向宮新丸衛門直元田邊十郎左衛門
門佐渡ヨリ奉有自銀千貫目ヨ貢之

○三日賦(左)天(左)除(左)心(左)也(左)

五山

第一 瑞龍山南禪寺
第二 雲龜山天龍寺

第三 惠日山東福寺

第四 惠日山東福寺

○五日群書治要貞觀政要續日本記延喜
式ノ内ヨリメ公家ノ制法タルハキ夏ヲ
標出シ献スハキ旨傳長老ヲ以テ五山ノ
僧侶ニ命ヒラル
今日駿府ノ海濱ニ黒魚ヲ得タリ形龜ニ
似テ首大キク犬ノ如シ背黒ク龜甲ニ均
シク三枚ノ尾且大鱗アリ重キ夏二十餘
人ニテ荷擔スト云々

○六日齋新(左)奉(左)夏(左)方(左)冬(左)也(左)

○六日霰降而寒甚夏玄冬)如之

入冬七初至

三郊、武丘大

所、官大夫、大

今日銀部、劍刺

計、命、

林、中、

左、舟、

○五日得書、

○七日夜、
林道春論諸為政ノ篇ヲ講

秋、

○八日、

○八日江府城經始石垣ノ根石ヲ置始ル

○十日新創ニ林更森給給森人蒙ノ給

○十三日五山ノ僧侶在府ノ葎法令ニ成
ルハキ夏ヲ四部ノ書ヨリ鈔出シテ駿府
ニ献ス

三宅作難波城記
四月十日大徳寺遺蹟奉安
物候表ニ依テ此物用意ニ依テ右大徳寺
土塔古方地行可曾遺蹟於此ノ所相承申
五井元吉方吉上ノ遺蹟ニハ
蘇我入道是大人蘇我河原守長直人遺蹟

〇八日 江府城...

〇十三日 山...

〇十六日 京都方廣寺大佛殿ノ鳴鐘ヲ鑄
初此用意ニ及止七月十六日 鳴鐘鑄畢

三宅作難波戰記曰...

〇四月十六日 大佛ノ鐘鑄畢

勅使殿上人叅向用意ニ依テ右大臣殿
上洛有テ執行可有被思召 斥桐東市
正耳元モ右言上ニ及テハ織田上野
外信包入道老犬齋同源者長益入道有

學齋大野修理亮治長元桐主膳正貞隆
以下ヨ石テ上洛ノ儀是北ヲ尋玉リ
治長左右ヲ不見繕進出テ御上洛無之
元御供粮調劑補ニモ不待御不審ニ於
テハ御延引可然由言上ニ織田兄弟モ
此儀可然申上ケレハ御上洛有ルニ
シニ定ル各退去ノ節老犬齋血ヲ吐忽
死ス少云々近貞曰是七月ホ奈則人事
十ヲレカ追テ考下ハ

○十九日節乃御遣例ト云々
古内録云々
此儀可然申上ケレハ御上洛有ルニ
シニ定ル各退去ノ節老犬齋血ヲ吐忽
死ス少云々近貞曰是七月ホ奈則人事
十ヲレカ追テ考下ハ

○止一日 勅使ノ兩卿外記官勢等江府
ヨリ飯路ニ赴ク處再駿府ニ登城シ饗宴
ヲ賜リ又 密詔ヲ述テ曰第一江府ノ
姫君御子諱ヲ以テ 女御ニ立ラルヘシ筈
二ハ 神君ヲ太政大臣力准三后ニ
宣下アルヘシト云々漸ク姫君御入内ノ
莫御領掌アリテ大相國准后ノ莫ハ堅ク
是ヲ辞シ玉フ且ツ秘府允諸家記録ヲ書
寫シテ進覽スヘシ公家ノ格式損益ニ
奏聞アリテ改正セラルヘキ旨御詔アリ

○止二日 右大臣殿諾允ニテ駿府伺公ノ
池田備後守知政未邑ヲ没収セラル是
神君ノ侍女金銀ヲ賄ハ密々諸侯ニ頒テ
置其利分ヲ得ル彼金子ヲ取次巫女數年
備後守力閨房ハ出入ス故ニ知政ニ數曲
其金子ヲ恩借シテ返濟ノ期ニハ每度草
袋ニ封印シ來女ニ渡セハ封印ヲ断テ改清
取付ルカ或日彼封印儘請取テ例ノ如ク
成ハシテ改メスメ飯後ニ見ルハ石
也巫女驚テ備後守力執務ニ相断ルト云

へ氏一向肯ハス依之巫女駿府ノ決新所
二願之既ニ食議ニ及フ處巫女ハ備後守
力執勢ニ向テ汝妹若ク媒トノ主君ノ妻
ヲ犯セ由ヲ述レ公彼者忽屈服ス
神君遂ニ知政カ国向根リニメ且共黨ヲ
批務ト成シ石ヲ以テ黄金ニ易ハテ巫女
ヲ誑惑スル莫ク成シタルヲ怒ラセ玉七
備後守父子三人ヲ有馬玄香頭豊氏カ封
内丹波國福智山ノ今日配流セラル此知
政ハ荒木梶津守村重カ一族久左衛門人

一族ナリト云々河城主ト是原左衛門
信之曰十五歳ニシテ奉人其子母弟次郎
政信家督ヲ祀テ是ノ九衛門位ト稱ス
出田家ニ属シ蘇品ニ立
高氏所造有計大旨字法講八有八今
封歳有幾十ニハ四是蘇品海常ニ故ニ立
其代ニテ奉人其意貯ノ作ニ千三三民
○年三月此程申事平内望
百一十

○廿三日牧野伊豫守成里初五十九傳藏時
江府ニテ卒又其遺領ノ内二千石ハ三男
傳藏成純千石ハ四男織部成常ニ賜シ是
嫡男將監成信次男宇右衛門成延ハ今ニ
池田家ニ屬シ播磨ニ在リ

○廿六日下総古河城主小笠原元衛門佐
信之四十五歳ニシテ卒又其子伊勢次郎
政信象督ヲ純テ是ヲ丸衛門佐ト稱ス

○廿八日 台德公ノ使節安孫對馬守室
計之四十五日 可為古所無 主小笠原氏 謝仁也

○廿八日 台德公ノ使節安孫對馬守室

信駿府登城人
六月十日
州日

○ 計 諸 所 登 加 入
廿八日 台 敷 公 大 知 府 喜 蔭 持 出 在 空

武德編年集成甲乙增補卷之五

慶長十九甲寅年

因村近貞 補

五月小

朔日

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

五月小
五月十六日
御名代酒并雅樂頭忠
世吉辰ニ依テ登城ニ今度古大臣從一位
御轉任ノ御賀ト御進献ノ太刀長光駿
馬騾白銀三十枚神君ハ捧ラレ但シ白
銀ハ僅ニ三百枚留置シテ其餘ハ返シ遺
ハサレ忠世力献スル處御太刀馬代攢獨
五百挺神君早速忠世ニ暇ヲ賜リ長光
ノ刀ヲ興ヘラレ
今日加藤北後守忠廣名代加藤右馬允正
方登城是ハ台徳公御外姪蒲生宰相才

○八日 台徳公ノ御名代酒并雅樂頭忠
世吉辰ニ依テ登城ニ今度古大臣從一位
御轉任ノ御賀ト御進献ノ太刀長光駿
馬騾白銀三十枚神君ハ捧ラレ但シ白
銀ハ僅ニ三百枚留置シテ其餘ハ返シ遺
ハサレ忠世力献スル處御太刀馬代攢獨
五百挺神君早速忠世ニ暇ヲ賜リ長光
ノ刀ヲ興ヘラレ
今日加藤北後守忠廣名代加藤右馬允正
方登城是ハ台徳公御外姪蒲生宰相才

以テ御養姫ニ進ラレ忠廣ニ嫁娶ノ命了
ル工八忠廣御礼ト以テ正方向以テ白銀券
服日ニ神君ニ献ス

立加藤泉譜日

...

...

...

...

...

○右大臣殿名代傳菅元桐東市正駿府叅
向今日登城ニ京都大佛殿尙造畢ニ洪鐘
不日ニ鑄終ルハニ當我且申ニ肉眼供養
スハニ卜言上ス且元構一箱幸滝白炭三
箱ヲ献ニテ并賜ヲ遂ル処御雜談刻ヲ授
セリ此節大佛殿洪鐘之銘文是伺其文曰
洛陽大佛殿鐘銘先序
欽惟豐國神君昔年掌普天承位億兆之上
外施仁政内飯佛乘是故天正十六戊子夏
之孟相攸平安城東創建大梵刹安立盧舍

那大像矣蓋夫慕蔭聖武帝南京之大像時
顏賴朝卿東大之再建者也雖然慶長七士
寅臘月初四日圖罹薨攸之愛已為烏有矣
戴髮含齒之術無不歎惜焉粵前征夷大
將軍從一位左僕射源朝臣家康公謂正二
位右相丞豐臣朝臣秀賴公曰舍那梵刹者
豐國之劍建也不幸而有變也不能無遺憾
焉右相丞何不繼先志乎右相丞豐臣朝臣
曰盛哉此言憑茲丕發弘願情志不待滿輒命元相東市
正豐臣且元再建舍那寶殿于慶長十四己

酉而成于慶長癸巳矣速畢其功者以大樹
釣命無豎右丞相志願不淺也童子聚沙之
戲猶功用不可測况又遇長者布金制其佛
身也萬億圓滿之受用身華嚴會正之教主
也臺上盧舍那佛乘上大秋迦華嚴葉中小
秋迦一華百億國一國一秋迦三重相闕互
為主伴音聲無邊色像無邊之相好不接寸
步可立而見寔變忍界成報土者乎其寶殿也
公翰削墨鄧工運斧麓栽棟宇高秀青雲上
瑾琛玉碣深徹黃泉底于搢万柱崢嶸具內大

梁小椽給繹其上繡檟燿雕拱玲瓏階堦疊
石鈴鐸鳴風壁門前聳玉廊四回詆都火夜
摩忽現下界蓬嶋瀛洲已在人間人天鬼神
所共瞻禮寔天下壯觀也緬憶菴沒羅那爛
陀大刹甲于西域加列何逸多大像冠于東
震又風猶在下矣加旃欲鑄鉛錫白臘積如
岳火官治工差肩如雲如殿彙鑿時奮鎔範已
設万鈞洪鐘一時新成矣周禮所謂十鼓鉦
舞康衡旋篆無不備焉昔在佛世梵王下鎔
鑄祇桓之金拘瑠絲造造石鐘諸佛出與亦

此鐘以備晨昏金銀銅鐵

不彊讓矣夫鐘者禪誦之越止齋粥之早晚
遠迎緩急之節必鳴之以警衆焉頭密法峇
之制莫先於鐘故建寺安衆必先置之然又
推折魑魅屈伏魔外三寶爲之證明諸天爲
之擁護劇賔吃王鈕輪頰空南唐李圭累械
忽晚雲門七條德山下堂其妙用不可勝計
矣蒲宇一声上徹天堂下震地府雷鼓霆繫
普及微塵刹土使人天幽明異類耳根清淨
以澄入圓通三昧其施不亦博乎金索籟簾
以文掛著室樓祝曰仰冀天子萬歲台齡千

秋銘曰
洛陽東麓
舍那道場
聳空瓊殿
橫虹畫梁
參差萬風
耀崑崙長廊
玲瓏八面
焜燿十方
境象兜夜
利甲支乘
新鐘高掛
其音千鎧
響應遠近
律中宮商
十八聲慢
百八聲忙
夜禪盡誦
夕燈晨香
上思聞空
遠寺知湘
東迎素月
西送斜陽
玉筍埤地
豐山降霜
告愜於漢
救苦於唐
靈異惟夥

功用無量
所庶幾者
國家安康
四海施化
萬歲傳芳
君臣豐樂
子孫繁昌
佛門柱礎
法社金湯
英檀之德
山高水長
峯度長十九甲寅年孟夏十六日
大檀那正二位右大臣豐臣朝臣秀賴公
奉行
元桐東市正豐臣且元
治工
京三條
署護屋越前少掾藤原三昌
前任東福後任南禪文英叟清韓謹書
東福寺清韓長老八五山人碩學殊二文章

東福寺
大如大路
橋
同日

名詞曰
大佛殿西向東南西北
南北五間也
西金剛一丈四尺
金色神丈七尺
豐願社有
迎高南北百間東西百間
慶長十九年四月大佛殿
造立畢
寬文二年 月依台命
銅像改木像
銅像改木像
鐵是世受錢下也
二王門前
再塚下
大明軍兵討取
此所
埋

手ヨリ指先迄一丈二尺大指六尺五寸
足裏一丈四尺横七尺
後光高十八間横九間厚五尺
小釈迦十六辨各二間宛
堂高桁行四十五間二尺五寸
行梁二十七間五尺五寸
棟高二十五間
棟木長八間中一尺五寸厚九寸
在敷九十二本指渡五尺五寸

以テ世ニ鳴ル最モ右大殿是ニ皈依
洪鐘ノ銘ヲ書セシム清書ハ聖護院御門
主興意卜定ムル也
方廣寺大佛殿造営之譜
本尊盧舍那佛高才十六丈
皆御首捺ヨリ座檀迄十間余
面像丈三間半
羅小以數三百五十大才二尺五寸宛
白毫二尺燐 每一丈 鼻七尺五寸余
口廣横八尺 豎二尺二寸
横中六尺定三尺四寸

大虹梁長十五間四尺五寸
 四方檀上中三間五尺五寸高七尺
 金剛八角內差渡十八間蓮華恒八尺亮
 廻廊四方四百六間二尺二寸
 梁行三間四尺七寸梁六間一尺
 棟高十一間五尺柱數十八本
 西金剛神丈六尺
 四方ノ右垣玉ノ磨キ此如ノ堂ノ高
 夏空ヲ貫キ朱ノ前ニ開キ玉ノ廊四方ハ
 廻リ天下無双ノ莊觀也

如斯莊嚴ト雖駿府ヨリ大殿經營ノ監使
 タル北鳥文丸衛門中村弥九衛門正村治
 右衛門清木久左衛門植木久兵衛五人カ
 姓名ヲ棟札ニ不書載是レ大坂ノ近臣等
 清韓長老ニ諭ス処ニシテ當時元相在京
 ノ上ハ織田老犬齋ハ病苦逼迫ニ小出播
 磨舟ハ本世年六月卒本ニ知臣ナキ故ニ
 織田百樂齋大野修理急渡辺内藏外等カ
 利害ヲ辨ハス存亡ヲ量ラス如斯無益ノ
 事ヲ發起シ旧例ニ違フ大ニ災ヲ成シ豊

○十一日 神君凡桐東市正ヲ召出サレ
命アリテ曰當時海内平治ノ農商化ニ務
リ擊壤ヲ諺ソ殊ニ右府ハ將軍ノ督ニ
ノ何ソ兵革ノ沙汰ヲヤ炎ルニ右府
ノ臣密々亡命ノ徒ヲ募リ干戈ヲ嗜ムノ
聞入アリアリ是何莫ソヤ且元カ日寔ニ
無誓ノ妄説也大野修理亮ヲ召寄尚又亂
斯アルハシト答リ炎ノ神君修理亮ヲ
後日召ミテ亂明アリト云々是恐ラシハ
北ナラシカ下程平治ノ世ニ

○九日從三位權中納言葦原朝臣利長卿
逝太享年五十三歳是加賀能登越中三品
ヲ嗣子利常ニ譲リ越中外山城ニ隱居ス
ル處也

○全書終リ想入ルニ古今事蹟ノ繁
○五洲東亞ノ事

○片桐東市正旦元今日御暇ヲ賜リ駿馬
先巢鷹ヲ供ハラレ右大臣殿ハ巢鷹ヲ進
ラレ

○廿一日池田越前守重影初テ神君ハ
拜謁シ御家人ニ例セラル是迄堪易尼ケ
寄ノ郡代ニ補セラル也重影ハ本願寺
門跡ノ執務下向内藏助重政入道法橋仲
之カ子ニテ按察使ト称スル也池田輝政
カ外甥タル故武門ニ列ト云々
今日肥前平戸ニテ松浦肥前守源鎮信入
道式部卿没即享年六十六歳ニメ卒ス

○廿一日池田越前守重影初テ神君ハ
拜謁シ御家人ニ例セラル是迄堪易尼ケ
寄ノ郡代ニ補セラル也重影ハ本願寺
門跡ノ執務下向内藏助重政入道法橋仲
之カ子ニテ按察使ト称スル也池田輝政
カ外甥タル故武門ニ列ト云々
今日肥前平戸ニテ松浦肥前守源鎮信入
道式部卿没即享年六十六歳ニメ卒ス

○廿一日池田越前守重影初テ神君ハ
拜謁シ御家人ニ例セラル是迄堪易尼ケ
寄ノ郡代ニ補セラル也重影ハ本願寺
門跡ノ執務下向内藏助重政入道法橋仲
之カ子ニテ按察使ト称スル也池田輝政
カ外甥タル故武門ニ列ト云々
今日肥前平戸ニテ松浦肥前守源鎮信入
道式部卿没即享年六十六歳ニメ卒ス

○廿六日 江府ノ城 營長 兩ノ邊 滯ニ今
日 一番ノ 場所 漸ク 石垣 築終リ 二番ノ 場
所ニ 石垣 ノ根 石ヲ 置クト云々
今日 松浦 肥前 守隆 信父 沓印ノ 所 芳 危急
ノ 告アリヨツテ 隆 信 城 營 土木ノ 役 免 許
セラレ 江府 ヲ 登ス 且 沓 印カ 病 平 愈セハ
長 寄ニ 至リ 政 所 長 谷 川 左 兵 衛 藤 廣ト 議
シテ 外 獲 宗ノ 寺 塔 ヲ 毀 破スヘシト
台 德 公ノ 仰 ヲ 蒙リ 本 國ニ 飯 山 処 忝ル 也
一 日 沓 印 平 去ノ 告 途 中ニ 於テ 聞之 本 國

○廿六日 江府ノ城 營長 兩ノ邊 滯ニ今
日 一番ノ 場所 漸ク 石垣 築終リ 二番ノ 場
所ニ 石垣 ノ根 石ヲ 置クト云々
今日 松浦 肥前 守隆 信父 沓印ノ 所 芳 危急
ノ 告アリヨツテ 隆 信 城 營 土木ノ 役 免 許
セラレ 江府 ヲ 登ス 且 沓 印カ 病 平 愈セハ
長 寄ニ 至リ 政 所 長 谷 川 左 兵 衛 藤 廣ト 議
シテ 外 獲 宗ノ 寺 塔 ヲ 毀 破スヘシト
台 德 公ノ 仰 ヲ 蒙リ 本 國ニ 飯 山 処 忝ル 也
一 日 沓 印 平 去ノ 告 途 中ニ 於テ 聞之 本 國

○廿五日居以平本ノ音書中ニ於テ麻本同
台野公ノ神ノ集ノ本區ニ如ク父方ノ上
口ニ相集テノ書也
身書ノ至ノ如門身也
子天ノ上ノ麻本ノ上ノ如野ノ平抄ノ上
吉也ノ日也
今日休申テ御書ノ到計又公野ノ御書
御書也
○廿六日工抄ノ麻書身兩ノ上ノ御書ノ今
日一香ノ御書也

○廿八日濃易明智ノ遠山民部女輔叔故入宗
子道ノ享年八十歳ニテ卒ス

○廿九日
六月
御書

○五月八日 粟田 陽明 山 名 神 氏 神 氏 氏

武德編年集成甲乙增補卷之六

慶長十九甲寅年

園村近貞

補

六月大

朔日

○五月八日 粟田 陽明 山 名 神 氏 神 氏 氏

○二日續日本記十卷本ノ内十卷脱落ノ処
五山ノ僧徒ヲノ書寫アラシメ補續功成
テ是ヲ献ス

附註

六月六

萬身十人中

國林、五皇、軒

左部記本集也甲丁御辭卷六

○西日江府ノ御使成瀬豊後守参向無鐘
土圭ヲ献セラル

西日江府ノ御使成瀬豊後守参向無鐘
土圭ヲ献セラル

○廿日古田織部正室勝平

○十二日蒲生源左衛門御成命ニ依テ會

津八トノ赴ク處須賀川ノ驛ニ病死ス此

由上藤ヲ壺テ其嫡子源三郎御喜後源左衛門

ニ三万石次男源兵衛御舎ニ一万五千石

ヲ授ケ嚮ニ御成ト氏ニ浪卒也ニ関十兵

衛一西浦生彦大夫モ會津ハ飯森アラシ

ムハキ旨御外孫工ハ蒲生下野弁ハ今日

恋曲ニ御下知アリ

○廿一日泉州堺ハ高客長嵩ハ往反ノ漢
也邪養宗門ノ徒彼ノ津ニ潛居スルノ聞
ハアリ依テ當時切支丹檢断トノ在京セ
シ山口但馬舟間宮權左衛門塙ニ至リ彼
黨若干尸ルニ於テハ近国ノ諸大名兵ヲ
卒テ是ヲ殲スハ且有馬元清門佐康純
日那縣ノ城地ヲ賜リ父ノ田領牝前高來
郡原ノ城ヨリ引移ラセシムル處ニ奴隸
多分切支丹タル工八日那ニ往リ莫ヲ難
渋スルノ告アリ山口間宮塙津ノ邪徒ヲ

○廿一日泉州堺ハ高客長嵩ハ往反ノ漢
也邪養宗門ノ徒彼ノ津ニ潛居スルノ聞
ハアリ依テ當時切支丹檢断トノ在京セ
シ山口但馬舟間宮權左衛門塙ニ至リ彼
黨若干尸ルニ於テハ近国ノ諸大名兵ヲ
卒テ是ヲ殲スハ且有馬元清門佐康純
日那縣ノ城地ヲ賜リ父ノ田領牝前高來
郡原ノ城ヨリ引移ラセシムル處ニ奴隸
多分切支丹タル工八日那ニ往リ莫ヲ難
渋スルノ告アリ山口間宮塙津ノ邪徒ヲ

捕八平治七八長壽へ渡海以れ始平原ノ
城ニ者シ其黨ヲ戮シテ後長壽へ赴ク
キ旨御詔ノ趣執事ノ族今日奉書ヲ呈ス
ト云々
平武曰廿一風日山口重弘伏見ヲ立テ長崎
堂志赴クト云々非十ラシカ
山口
○廿一日
○廿一日

○廿二日 禁闕ニ於テ獲樂アリ浴喬ノ
内建治又三郎ト云フ吉岡流ノ劍術者立
十カ方是ヲ見ル驚固ノ士是ヲ割シ禁門
ノ外へ追出ス処桐服ノ下ニ暢差ヲ隠シ
紛シテ再ヒ宮門ニ入衛士ヲ斬殺シ大ニ
躁動セシム炎レモ勢馳乘リ建治ヲ殺
害シ其庭上ヲ穢ス處天娥ニ雲ヲ起シ雷
鳴甚雨シテ忽其不淨ヲ流シ灑ケト云々

因曰
禁裏御所度長十七年五月五日御造營
始ル南方米澤中納言仙臺中將山吹女將

安藝女將豊前女將紀伊侍従秋田侍従
 美作侍従安房侍従加藤藤松南部奥平
 松平根津寺松平茂厚寺丹伊右近大夫
 本多美濃寺西方越前女將播磨宰相生
 駒寺澤北方豊臣右大臣尾張宰相東方
 長門侍従筑前侍従丹後侍従出雲侍従
 松山侍従河内侍従藤原佐賀侍従土佐
 侍従有馬筑後侍従鳥井富田等纂之同
 十八年三月十八日御移徙也

○廿四日武城ニ於テ御轉任ノ賀議卜メ
 積樂ヲ僅ニ侯伯諸士ヲ饗セラル

○廿九日京都板倉伊賀守ヨリ太ル廿一
日建込カ禁中狼藉ノ極注進ノ檄駿有ニ
至ル
是月播磨ノ後室良正院駿有ヨリ飯國卜
云々
是月諸島暴雨殊ニ根河泉ノ三箇國洪水
田園妻ノ荒地卜成ル
是月或日後藤庄三郎ノ神君ノ御前ニ伺
候久干晴林道春京都ニ学校ヲ建テ諸生
ヲ教授セシマシメテ請フ
神君此莫然可也

○廿九日京都板倉伊賀守ヨリ太ル廿一
日建込カ禁中狼藉ノ極注進ノ檄駿有ニ
至ル
是月播磨ノ後室良正院駿有ヨリ飯國卜
云々
是月諸島暴雨殊ニ根河泉ノ三箇國洪水
田園妻ノ荒地卜成ル
是月或日後藤庄三郎ノ神君ノ御前ニ伺
候久干晴林道春京都ニ学校ヲ建テ諸生
ヲ教授セシメテ請フ
神君此莫然可也

永祿四年辛酉年藤原隆房
生
元和五年九月廿五日
卒

其使能キ土地ヲ巡視スルニ宣フ其後
庄三郎ニ仰アリケルハ道春学校ヲ掌
シキ歟後希カ曰如壽院惺窩ヲ以テ學頭
トセシメ復テ道春敬スト言上ス 神后兼
惺窩ノ論徳ヲ知玉フ良久シカリケレハ大
ニ感セラルル歟此冬難波ノ聞起リ翌年
薨御故ニ学校ヲ設ルニ至ラヌ

武徳編年集成甲乙増補卷之七

慶長十九甲寅年

七月小

岡村近貞

補

○朔日夜ニ入冷泉爲滿卿古今和詩集ヲ
講述ノ竟宴ナリ時ニ人九ノ傳イツレノ
書本在ルヤト問ハセ玉フ爲滿卿曰是神
秘ニノ傳ハ難シト云々林道春伺公ス又
渠ニ向玉フ處ニ道春カ曰萬葉集ノ内四
人ノ人鷹アリ殊ニ和詩精妙ヲ得タルハ

○今日大坂殿中ニ於テ去月元桐東市正
 駿府^即下^桐其子出雲弁高後ヲ本^多
 上野^外カ^聲トセ^レ由^ヲ約^シテ^ルヨリ諸
 臣譏鋒頻リニシテ右大臣殿甚^ク市正^ヲ
 疑ハル^ル処山口但馬弁間宮權左衛門^殿
 非^ニ燕宗^門ヲ^糾サ^レ爲^ノ大坂ニ至^リ當^月
 廿一日大佛供養トシテ右大臣殿上^洛ア
 テ^ハ市正^叛テ大坂城中^ハ東^勢ヲ^引入
 定^殿ヲ^虜トス^ヘキ^聞ハ^卷説^喧シ^ク故^彼
 供養^ヲ延^滞アル^ルハ^シト^觸催^サル^ル然^レモ^坂

○二日角倉了以死六十一
 上ス為滿卿報災トシテ退^奈乃^リト^云
 疾本^ノ人^誓也^何レ^シ神^秘ア^テニ^ヤト^言
 喜^シト^云ハ^シテ^ハ王^ノ不^信御^祇佛^學
 樂^シト^云ハ^シテ^ハ古^今ノ^世ノ^世
 氣^身十^六年^寅年
 國^林直^貞 申

非徒兵ヲ勤スニ足ラズ山口側宮忽
 六數人ヲ補入塲速平拍入ト云々
 一曰大平州等十
 二曰京都角倉子以死ス歳六十一本長
 三曰大和
 四曰大和
 五曰大和

史吉御抄去歲長元三年
 三月廿日

○十四日江府ヨリ土井大炊頭ヲ以テ京
 極權中納言定象卿真蹟ノ伊勢物語ヲ
 神君ハ献セラル道春ヲ以テ具奥書ヲ讀
 セ玉フ處ニ此本後土御門院ノ官庫ニ
 アリケルヲ能勿ノ富山義統入道ニ賜リ
 其後段々流轉シ三好長慶力手ニ入彼象
 領廢ノ泉勿塚ニ在リシヲ細川幽齋求メ
 得テ尾陽薩摩弁忠吉卿ノ取望ニ依テ是
 ヲ附屬シ彼卿逝公以後江府ノ官庫ニ納
 置ルト云々

○十六日冷泉中納言爲滿卿鼻祖定家卿
筆ノ三十六詩仙一冊ヲ携ハテ神君ノ覽
ニ備フ彼象ニ定家卿ノ筆跡餘アリト
云ハ凡此一冊殊ニ勝ルト云々
註曰右冊ハ作者一人ニ和詩十首宛
テ三百六十首ノ内定家卿ノ意旨ニ協
テハル和詩二首宛ニ切薄破子帛ヲ以テ
付紙アリ四竿本ニシテ唐廻抄交糸ニ
テ是ヲ綴ルト云々

○十四日
○十六日
○十七日
○十八日
○十九日
○二十日
○二十一日
○二十二日
○二十三日
○二十四日
○二十五日
○二十六日
○二十七日
○二十八日
○二十九日
○三十日
○三十一日

○内

○今日洛陽大佛殿紫銅ノ洪鐘鑄終ル高
 一丈八寸經リ九尺一寸厚ヲ九寸重キ壹
 萬七千貫目ト云
 此須南光坊天海 神君ニ達シテ此
 度大佛用眼ノ導師ハ仁和寺ノ御門主又
 此由既ニ妙法院御門主供養ノ道師又
 上ハ彼御門主ニ於テ必ク用眼ノ道師ニ
 相兼ラルルハキ夏ニ真言ノ御門主用眼ヲ
 勤行アラハ座論出未スハキ歟故太尉殿
 下ハ時京都所司代前田徳善院法印玄以

今日洛陽大佛殿紫銅ノ洪鐘鑄終ル高
 一丈八寸經リ九尺一寸厚ヲ九寸重キ壹
 萬七千貫目ト云
 此須南光坊天海 神君ニ達シテ此
 度大佛用眼ノ導師ハ仁和寺ノ御門主又
 此由既ニ妙法院御門主供養ノ道師又
 上ハ彼御門主ニ於テ必ク用眼ノ道師ニ
 相兼ラルルハキ夏ニ真言ノ御門主用眼ヲ
 勤行アラハ座論出未スハキ歟故太尉殿
 下ハ時京都所司代前田徳善院法印玄以

真言宗タル上高野山ノ木食興山電遇尊
キ故每度真言宗ヲ左トシ天台宗ヲ以テ
右トス是ハ唯據スハカラサル由訴ヘ
テレハ神君他ノ供養ノ复用ユヘカラス
聖武帝南都大佛造營ト源頼朝同ク再興
ノ時ト兩度ノ供養ノ例ニ准スヘキ旨ヲ
仰出サレ依テ南光坊ト金地院ヨリ片桐
市正カ許ハ書牒ヲ呈ス
山名名跡志曰大佛殿撞鐘堂ハ南廼廊
外有四間四方ニ而柱數十二本ト云々

○十七日贈大相國信長公ノ舍貧從三位
行右近衛權中將兼上野外平朝臣信兼入
道老犬齋享年六十七歳立大坂ニ極老
ス此老犬齋ハ織田家ノ元當時大坂ニ依
スルト雖老犬齋能ク知徳ヲ兼備シ片桐
市正小出播磨守ト交リ厚ク実ニ右大臣
殿補佐定殿師範タルノ処今極老ニ及シ
テ柱石ヲ失フ播磨守ハ本年没シ今老人
極スルニ及シテ近臣大ニ感取ル中

○十八日板倉伊賀守并片桐カ方ヨリ八月三日早旦仁和寺御門跡大佛間眼日中ニ供養アルル座次八天台宗ヲ尤座卜ニ鷹司殿下院公卿着座以由布施規式等造呈進ス

或書曰大納言此節導師大覺寺御門跡一乘院御門跡三空院御門跡七勅使正親所大納言并古並南宮中辨本三親傳平陸直辨藤原十士出調大膳四計身公合案外三立

○十九日勢品長島ノ城主福島掃部頭正頼カ從士恨メル復アリテ往年主人ノ不仁ヲ訴フ炎シ臣卜メ主ノ非義ヲ顯スノ罪ヲ以テ御許容ナシ爰ニ於テ彼郎從逆電セシヨ正頼普ク尋テ終ニ駿府大下馬ニ於テ彼者カ住所ヲ求メ得ル処町司彦坂九兵衛光正ニ相斬ラス家臣五人ヲ遣シ理不盡ニ搦捕ケレハ光正怒テ正頼カ讀責スト云ヘ此聊カ屈服セサルニハ光正此趣書上ス処先達而兄尤齋門大夫

正則カ旧勲ニ賜ニ遣使ノ御汝汰ニ及ノ
処狼藉ノ所爲ヲ以テ其搦捕ヘシ從者五
人ヲ禁銅セラル且掃部頭整居スヘキ旨
命セラル
五
命セラル

○廿日越前福井ノ城下ニテ結城九衛門
督藤原晴朝享年八十三歳ニシテ卒ス是
ハ中納言秀康卿ノ養父ニノ當時養孫忠
直卿ヨリ厨料三万石ヲ進セラルト云々

結城家記曰
左大臣魚名公五代鎮守将軍藤原秀
郷卿六代太田太郎行政ノ男下野大掾
政光ノ三男上野外朝光総昆結城ノ郷
ヲ從右大将家賜リ結城七郎朝光ノ稱
号ハ賴朝卿ノ賜ルル也是レ結城ノ始
祖ニノ朝光二十代晴朝ニ至テ血流絶

○廿一日飛鳥井黃門雅庸卿 神君ノ御
所望ニ應之 源氏物語ヲ講セラル

○廿六日片桐市正カ羽書到未ニ未月二
日大佛間眼供養ノ由重テ註進スル此
間供養鐘銘同序笈大殿ノ棟札ヲ讀セラ
シシカ棟札南都大佛ノ旧格ト相違シテ
鐘ノ銘ノ序ニ葉上ノ大款迦葉中ノ小款
迦互爲主伴ト書タルハ右府ノ昔ニ代リ
テ世ヲ治ムヘキ意ナラシ同銘ニ國家安
康ト昔諱ヲ断夏咒スルト覺ナリ供養モ
宜シカラス関東ノ添夫カ姓名工匠ノ其
名ヲ避テ棟札ニ書セサル夏皆大坂ノ意

○廿六日片桐市正カ羽書到未ニ未月二
日大佛間眼供養ノ由重テ註進スル此
間供養鐘銘同序笈大殿ノ棟札ヲ讀セラ
シシカ棟札南都大佛ノ旧格ト相違シテ
鐘ノ銘ノ序ニ葉上ノ大款迦葉中ノ小款
迦互爲主伴ト書タルハ右府ノ昔ニ代リ
テ世ヲ治ムヘキ意ナラシ同銘ニ國家安
康ト昔諱ヲ断夏咒スルト覺ナリ供養モ
宜シカラス関東ノ添夫カ姓名工匠ノ其
名ヲ避テ棟札ニ書セサル夏皆大坂ノ意

味心得難シト仰ノ趣本妻上野外書ヲ飛
セ板倉伊賀舟へ是ヲ傳達ス
或書曰
南光坊天海大佛鐘銘ヲ見テ曰是ハ文
文ニ咒詛ヲ含ム其故ハ銘ノ内ニ東迎
素月西送斜陽ト云ハ関東ヲ以テ陰月
トシ大坂ヲ以テ陽日トス又鐘ニ四ノ
品アリ一ニ告剋ノ鐘是ハ役人撞キ時
大ヲ知ル迄也銘ニ不及二ニ除災ノ鐘是
ハ祝シタル儀ニテ祈禱願脱未代安衆

災難ヲ除ク趣意ヲ銘ニ書ス三ニ菩提
ノ鐘也是ハ精靈追福ノ爲ニ鑄ル正覺
廻向ノ趣意ヲ銘ニ書ス四ニ調伏ノ鐘
也是ハ惡業ヲ退治ニ惡敵ヲ咒詛ス故
ニ銘ニ其趣意ヲ含ム除災ノ銘ニ少異
也除災ハ一ノ宛所ナシ調伏ハ心又目
當有テ銘スルト云々

○廿八日賀加長臣前田對馬守亦長奥村
撰津守永福本尋安房亦政重永原九衛門
尉 駿府 參向シテ故中納言利長卿
遺物トノ不動國行人賜差備前三郎國宗
ノカヲ猷ニ利長隱居料能品十六万石余
是又當利常ニ賜ラシヤト密々相鞠フ處
ニ右四臣ヲ召テ加賀能登越中三ヶ國一
圓ニ利常ニ宛行イ但三万石ヲ以テ利常
ノ室家厨料トスヘシ利常弱年タル間家
臣一統ノ忠誠ヲ勵シ傳立ルヘキ旨御錠

○廿八日賀加長臣前田對馬守亦長奥村
撰津守永福本尋安房亦政重永原九衛門
尉 駿府 參向シテ故中納言利長卿
遺物トノ不動國行人賜差備前三郎國宗
ノカヲ猷ニ利長隱居料能品十六万石余
是又當利常ニ賜ラシヤト密々相鞠フ處
ニ右四臣ヲ召テ加賀能登越中三ヶ國一
圓ニ利常ニ宛行イ但三万石ヲ以テ利常
ノ室家厨料トスヘシ利常弱年タル間家
臣一統ノ忠誠ヲ勵シ傳立ルヘキ旨御錠

洛ニ次スル大法會延引スヘキニ非ス先
是ヲ執行シテ後且元死ヲ遂ケ神君ノ
御怒リヲ債ハシ由詞ヲ盡シケレ共板倉
敵テ驚カスメ未月二日ノ供養ヲ默止ス
ニ極リケレハ市正清韓長老ヲ呼テ札斷
スルニ全ソ呪詛ノ詞ニ非スト故實ヲ糾
シ世ノ廣々碩學ヲ召テ按問ヲ遂ラルハ
キ旨陳謝セシカハ市正家人梅戸忠助ヲ
長老ニ副テ夜以テ日ニ繼テ駿府ニ下シ
神君ハ執夏ニ倚テ是ヲ申披カシメシ小

或書曰
且元此節自分ノ施行於三糸河原五百
石ヲ捨スト云々
又曰
八月十六日完眼供養ト極ム十五日板
倉伊賀舟家人板倉奎右衛門ヲ以テ明
日ノ執行ヲ止ムト云フ是レ非ナルカ
何者カ大佛殿山門ノ柱ニ

昔鬼の難波乃事も韓長老ナリ方板の邊の控境
境の事と悪むるの云解一世中大板と云ふは其の事

武德編年集成甲乙増補卷之六

慶長十九甲寅年

岡村近貞

補

八月大

○

朔日於大坂頻リニ兵ヲ集メ兵具ヲ調

ル由密使駿府ニ是ヲ告ル

五京指一五〇大制建共少下勤備心甲賀手
五日郡倉町望少多下五〇〇新天白附市
二日京橋大御所人新所駐日新下島松山

武德編年集成甲乙増補卷之六
慶長十九甲寅年
八月大朔日於大坂頻リニ兵ヲ集メ兵具ヲ調
ル由密使駿府ニ是ヲ告ル

○二日京都大佛殿入佛開眼供糧日限ノ處去ル
廿九日板倉伊賀守是ヲ止ルニ依テ所桐市
正京都ニ止リ大佛殿近辺ヲ護衛シ伊賀守
家人組子カ同心小貴銭混雜ニ依テ是ヲ掣ス
又大坂宮中ニ於テハ織田大野渡辺木村等
日々評議ニ及ヒ專ラ大御所ノ雄謀ニ陷
リシト是ヲ憤リ拳兵ヲ及シ事可ナルヘシ
ト言上シ密是ヲ計フ

○三日神君寢殿ノ庭上ニ假山ヲ築キ
泉水ヲ湛ヘ魚ヲ放ツヘキ旨宦馬ノ吏諏
訪部惣丸衛門正吉ニ命セラル

○右大臣殿命ニ依テ明石掃部外全登上
使トシテ真田前丸衛門佐幸村カ塾居ノ
地紀尾高野山ノ麓九度ニ赴キ今日幸村
ニ會シテ奉書ヲ渡ス

○四日大工頭中井大和
大佛殿棟札ノ寫
ヲ献ス先達而上覽ニ備ハル
ニ違ハス

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

○五日板倉内膳正重昌上洛シ
五山ノ僧侶碩学ノ族ヲ集メ
大佛鐘銘並序文ノ失ヲ衆議
判ヲ得テ是ヲ呈進スヘキ旨命
ヲ達ス

七

○今日大坂營中諸臣評議ノ節
大野主馬双カ日此度大御所ノ
難向不答及シテ舉兵ハ無謀ノ
軍ナランカ且元計テ清韓長老
ヲ駿府ニ下向セシムルト難老
臣下向シ諫謝アラシク復然ル
ヘシ其上難向有ルニ於テハ存
亡ヲ極ムヘシト云各諾ス

○六日東海道大風微屋ハ空中ニ吹騰ル
程也ト云々

○

今日駿府ニテ清韓長老鐘銘ノ義陳謝

不卜錐蕪々金地院宗傳長老田光寺等鐘

銘祀誕ヲ含メル由言上セシカハ清韓カ

諫謝ノ趣散テ分明ニ執達ス此久ナリ所

司彦坂九兵衛ニ御願々本身上野父宅ニ

テ時々糺断セラユ心ト云々

○此日討書内郭五堂昌土前ニ此山ノ

○七日、神君在府ノ諸郷飛鳥井雅席冷

泉爲満日野輝資入道唯心ノ三郷ハ山崎

宗鑑筆天文二十九年二十一年和哥集ヲ

見セ玉フ

傳曰

山崎宗鑑ハ足利義尚公ノ侍童ニシテ

志那弥三郎範永ト云山崎離宮ハ幡宮

ノ側天満宮ノ傍是レ宗鑑幽居ノ地也

故ニ山崎ノ宗鑑ト云

心之ときは雨も止しし其年の月 宗鑑

八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日

○九日 神君再七 飛鳥井冷泉 日野三卿
= 青蓮院 尊應親王 飛鳥井采雅ノ奥書了
ル 定家卿ノ古今和歌集 且西三条實隆同
實證 西卿ノ三代和歌集ヲ見玉ノ卷鳥井
為滿 卿古今和歌集ニ於テハ頗ル不審ト云
今日 勢 易ニテ
天照皇大神宮同國ノ郡野上村ニ飛遷
ラセ玉ノ由訛 宣アリ 是兵乱ノ相兆也
○十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日

○十日 神君三再ヒ三卿能傳長老ニ弘
法大師ノ般若心經佐理行成西卿ノ筆跡
定家卿ノ新勅撰和哥集道遠院称名院筆
跡伊勢物詔二部源氏ノ系譜等ヲ見セ玉
フ各目ヲ驚カスト云々

○十一日 山名右衛門佐豐國入道禪高并
元豐ヲ召テ兩吟ノ連歌表裏ノ會アリ其
発句ニ

山名右衛門佐豐國入道禪高并
元豐ヲ召テ兩吟ノ連歌表裏ノ會アリ其
発句ニ

○十二日 山名右衛門佐豐國入道禪高并
元豐ヲ召テ兩吟ノ連歌表裏ノ會アリ其
発句ニ

○十三日南垂ノ高客 神君ヲ拜謁シ絲
帛等ヲ献ス

○十二日山崎寺山崎寺 聖國聖國人並並新志新志并并

○十七日南都真福寺南大門法隆寺護持
堂聖聖院法華寺四箇所ノ棟札ノ爲中井
大和是ヲ神君ニ捧ク皆工匠ノ棟梁カ
姓名ヲ戴ル上覧ノ上此度大佛殿棟札中
井カ姓名ヲ書サル此亦御憤リアリ也
因曰
大和國添上郡奈良興福寺南大門ハ金
剛力士ノ二王ノ像ヲ若入土人澤厚門
下云當山伽藍再建ノ節諸國ノ大名是
レヲ一堂亮立ル南大門ハ定紋澤厚所

ル大名是ヲ造立スト云
 同國平群郡斑鳩里法隆寺金堂ヲ護持
 堂ト云多門廣目持國增長少四天ヲ安
 置ス北条相模舟時頼ノ造立寄進ト云
 同國添上郡法華寺村法華寺ハ國分寺
 也藤原淡海公造立ト云
 邦高ト云
 大味長ト云
 堂至堂到本寺
 十日日南攝真跡中南大日赤利寺對岸

○今日元桐東市正且元同姓主膳正貞隆
 大野修理亮治長駿府ニ着シ本号上野外
 カ内意ニヨツテ神君ノ御憤リヲ憐リ
 安部川ヲ越サツノ鞠子ノ徳願寺ニ居ス
 三臣鐘銘ノ陳謝トノ下向スル処也依之
 本号上野外正純安藤帶力直次成瀬真人
 正正成徳願寺ニ往テ神君御憤リノ趣
 ヲ達シ尚三臣如斯出府ニ於テハ貢稅収
 納ノ時節旁大坂ノ政事瘳ルニ及乙カ市
 正一人逗留ニ主膳正修理亮飯坂アルハ

キカト告ル工一市正徳願寺ニ在留シ兩
人飯ルト云々
五
木
三
二
一
今日

○十八日板倉内膳正重昌京都ヨリ今日
着メ曰五山碩学ノ長老七人ニ鐘銘ノ凶
詞ヲ尋ル処ニ各天海崇傳円光寺道春亦
昏議スル処其理十キニ非ス若クハ兎詛
ノ心アリテ彼文句ニ及ヘル欵疑似ノ間
決シ難キ者ヲ称スル由言上又南光坊傳
長老道春侍座メ評議ノ上清韓長老飯落
ス尤塾居スハキ者命セラル又松平右衛
門大夫正綱諸宗ノ僧徒英文ヲ集メ同ノ
処五山長老ノ答ニ同シク只獨リ五山ノ

妙心寺ノ海山和尚ノ曰清韓文章ヲ以テ
世ニ鳴ル下愚文章ノ意不得ト雖是ヲ心
有リト謂ハハ則心アラレ清韓其凶詞ヲ
知テ書スハカラス唯天下ノ泰平ヲ祝シ
且舎那ノ功德ヲ著スモノナラシカト云
海山ノ言句ニサニ當レルカト世ニ是レ
ヲ称譽スト云々
○十八日

○十九日元相東市正旦元ヲ鞠子ノ徳願
寺ヨリ駿府ノ城下大野壹岐守氏治ノ宅
ニ召寄ラル
今日五山ノ碩女七人カ鐘銘批剡ノ書ヲ
道春是ヲ写シ江府上献ス

○廿日右大臣殿元桐カ陳謝ヲ乞ス夏ヲ
得ス德願寺ニ寓居ス卜厨ヲ且驚キ且懼
レ玉ノ大藏卿局大野修理亮
亮同
永原局正栄尼豊渡臣
臣内藏未カ
カ母ニテ
テ兩局ト云
銘ノ凶詞母子曾テ知サレ処韓長老ヲ
糺
断セラルルハキ皆ヲ含メ今日大坂ヲ登シ
駿府ニ赴シム是實ハ淀殿ノ下知ニメ大
野修理亮渡辺内藏人是ヲ計フト云々

○廿日右大臣殿元桐カ陳謝ヲ乞ス夏ヲ
得ス德願寺ニ寓居ス卜厨ヲ且驚キ且懼
レ玉ノ大藏卿局大野修理亮
亮同
永原局正栄尼豊渡臣
臣内藏未カ
カ母ニテ
テ兩局ト云
銘ノ凶詞母子曾テ知サレ処韓長老ヲ
糺
断セラルルハキ皆ヲ含メ今日大坂ヲ登シ
駿府ニ赴シム是實ハ淀殿ノ下知ニメ大
野修理亮渡辺内藏人是ヲ計フト云々

○廿七日江府ノ御使水野監物忠元駿府
ニ登城久は大佛殿鐘ノ銘並序文ニ凶詞
アリ故欣ト云

○廿七日江府ノ御使水野監物忠元駿府
ニ登城久は大佛殿鐘ノ銘並序文ニ凶詞
アリ故欣ト云

○廿八日 郡野上村ヨリ
天照皇太神宮山田上迄言是アリ千時雷
鳴暴風ス未刻坂東大洪水遠駿ノ間ハ
風吹スト云

○廿九日 本尋上野双正純御使トノ江府
越ク其故ヲ知ルモノナシ尤急使ナルヨ
今日山口但馬舟飯府神君上并賜ス肥
前高未郡ノ切支丹ノ徒若干長崎ニ送り
西坂ニテ斬戮シ其骸ヲ一惟トス鶴島寺
沢大村有馬四家ノ士卒ヲ以テ長寄ノ邪
獲寺十一院ヲ焼弃ル奉行長谷川九兵衛
藤廣弥長中悉ク合議ヲ遂ル由言上ス
○大藏卿局正采尼今日駿府ニ着ニ大野

○廿九日 本尋上野双正純御使トノ江府
越ク其故ヲ知ルモノナシ尤急使ナルヨ
今日山口但馬舟飯府神君上并賜ス肥
前高未郡ノ切支丹ノ徒若干長崎ニ送り
西坂ニテ斬戮シ其骸ヲ一惟トス鶴島寺
沢大村有馬四家ノ士卒ヲ以テ長寄ノ邪
獲寺十一院ヲ焼弃ル奉行長谷川九兵衛
藤廣弥長中悉ク合議ヲ遂ル由言上ス
○大藏卿局正采尼今日駿府ニ着ニ大野

壹岐守氏治カ宅ニ往テ片桐市正ニ對面
ス直ニ登城スル夏ヲ憚リ七斬所ノ旅宿
ニ居ス即刻ニ神君ノ侍女阿茶局ヲ招キ
鐘ノ銘ノ夏ヲ陳謝スル也阿茶局此趣キ
言上ノ処即日登城ヲ免セラルル忽辭歸ス
神君ノ命ニ曰右府ハ將軍ノ婿ニ以則
吾孫ニ拘シテ常ニ愛慕ニ成人ノ
後ヲ待得ル也察ルニ右府ハ勿論母堂
モ將軍ノ御臺ト姉妹ナシ害心ヲ含
ヘカラス唯家臣等カ其心ヲ僻テ浪士ヲ

招キ募リ軍ヲ修練スルカ早ク侍臣阿
黨ノ輩ヲ退ケ直實ノ情ヲ顯シ將軍ト
父子ノ親ヲ厚リセラルヘキ旨汝等熟ク
謀リ取リ報スヘシ尚餘意ハ片桐市正ニ
含メ飯スヘキ旨御錠アリテ鐘銘ノ事ハ
御沙汰ナカリシカハ両女下向ノ砌リ甚
ク辛苦ノ末夕知ラサル漢字ノ訓款ヲ俄
ニ習イ道スカラ勞スルノ処御怒イサカ
カ十ヶレハ歡然トメ寓舎ニ飯ル尚阿茶
局ヲ以テ江府下向御臺所窺ノ儀願フ

此其旨ニ任スル者ニ侍御アリ九月朔
日早朝江府府西女下向受命於此院桐
市正不神君ノ雄謀ヲ察シ右大臣殿微運
ヲ長歎ニ病ニ卧スヤヤ然リ陽照如
頃日駿府ノ市中夜々大怪初聞又兵乱即
世入キ莫ヲ老兒死ニ謳歌以舞之
無不始相疎遠ノ人ニ尚猶意懐并陳救
父子相離レテ事也事已五石所奇如新
重ノ筆果且學直實師許ヤ懸心書降軍
此ノ事ハ年久月深又ハ四日許ハ新世阿

武德編年集成甲乙増補卷之九
慶長十九甲寅年
國村近貞 補

九月小

○朔日東埔寨國ヨリ虎子二匹鷓鴣一匹
ヲ献メ南蛮人耶揚子是ヲ捧ク虎子一匹
ノ尾骨ノ上ニ毛生テ風ノ文字ヲ鮮然夕
リ觀ル者是ヲ奇トス江府 竹千代君
國君上進セラルト云且阿蘭陀人糸本綿
竜腦下子等ヲ献メ

○四日

○三日 向野野世大夫合鳳八寸命十七歳
○三日 蘇我五夫金春三京政官常二寸博八

○六日 日本身 上野 从江府ヨリ 飯リ 今日 登
城ス 清韓長老 密々 大坂ニ至リ 右大臣 殿
ニ賜シ 且右田 織部 正重 清韓ヲ愛育ス
ルノ 嗣アリテ 再御 憤リヲ含ニセラル 是
上野 从密言上スル 処也

人

人

○九日 台徳公ノ御使神尾五兵衛守也
駿府ニ参向シ重陽ヲ賀ス
○今日元桐東市正登城シ江府ノ御使神
尾五兵衛上ヲ以テ面談ヲ遂ケ大藏卿局
正栄尼拜賜ヲ遂ル処右府母堂片ニ西女
久シク参府ニテ心悩アルハ急キ飯坂
スヘシトテ義服黄金ヲ玉ハル時ニ西女
御返答ヲ本号上野外ニ荀ノ処先ニ御
錠ヲ通り右府赤心ヲ顯ヘクハ是ヨリ
何ノ等閑及小工ヲ元桐ニ任暇ヲ賜

り上野外ヲ以テ時服黄金ヲ玉ハル
今日於江府里見安房舟忠義重陽ノ賀ト
シテ登城ノ処三ヶ条ノ罪ヲ詐シ下シテ
一ハ大久保相模舟ハ米大豆漕々補分合
カ葦如公儀莫二ハ城普清并道ヲ作り川
ヲ掘テ不惶公儀莫三ハ過分限人数ヲ抱
置之儀非忠儀之志有私之留意左右之罪
ヲ以テ房所一圓並常所之内鹿島三万石
没収セラル間居城房所鎌田並南渡シ大
久保仙丸忠任カ方ハ整居スハキ旨命セ

○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上

○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上
○十一日大藏卿局正栄尼駿府ヲ参上

願クハ大御所ノ命ヲ蒙リタレト云々
使ノ日既ニ西人先達テ相窺ケルカ
カ胸收ニ在ハシト仰アテ其所以
セ玉ハツト答ツ市正尚固ク辞シテ命ヲ
蒙ラレト云々西人皆ハ但元無批
駿府江府ノ御疑ヲ敷セリ莫一ニ定殿
江府下向第ニ右大臣殿國替弟三右大臣
殿未聘江府力此三ヶ条ニ過ハカ
雖此重莫ニシテ臣力計ハカラサ
然レ厄御疑無行於テハ是非ナシ
飯坂ノ

上其一事ヲ呈進スハキ旨ヲ答ハ
飯ニ尚療養ノ爲暫ク駿府ニ止ル

~~~~~

○十三日飛鳥丹雅庸郷飯洛ノ殿ヲ玉リ  
白銀三百兩綿二百抱ヲ授ラル  
今日邪嶺宗ニテ罷セラルヘキ原主水先  
達テ遂電セシヲ関東ヨリ捕上未ル則渠  
カ十指ヲ斬テ額ニ燒印シ此者受音スル  
ニ於テハ其人ヲ曲事ニ行フヘキ旨制策  
ヲ負セテ放逐セラル彦坂九兵衛是ヲ沙  
汰ストト云主水逆ニ大坂ニ至リ駿加  
今日松平肥前守利常家督御礼トノ駿府  
ニ参着ス

○十三日飛鳥丹雅庸郷飯洛ノ殿ヲ玉リ  
白銀三百兩綿二百抱ヲ授ラル  
今日邪嶺宗ニテ罷セラルヘキ原主水先  
達テ遂電セシヲ関東ヨリ捕上未ル則渠  
カ十指ヲ斬テ額ニ燒印シ此者受音スル  
ニ於テハ其人ヲ曲事ニ行フヘキ旨制策  
ヲ負セテ放逐セラル彦坂九兵衛是ヲ沙  
汰ストト云主水逆ニ大坂ニ至リ駿加  
今日松平肥前守利常家督御礼トノ駿府  
ニ参着ス

○十四日江府御使土井大炊頭利勝駿府  
登城ス是レ近日松平北前守利常駿府参  
向ノ爲也 神君則利勝ヲ召レテ密旨ア  
リト云御側ノ流其趣意ヲ知ラヌト云々

○十三日齊島中無高城頭前シ跡ト云々  
今日平泉宗ニテ飛子ニシテ八ノ十  
直ニ逆守子ニテ東口ニテ敵上本ノ  
今日平泉宗ニテ飛子ニシテ八ノ十  
直ニ逆守子ニテ東口ニテ敵上本ノ  
今日平泉宗ニテ飛子ニシテ八ノ十  
直ニ逆守子ニテ東口ニテ敵上本ノ

六  
一  
一

六  
一  
一

○十四日工部卿於壬午大興殿休養  
○十五日工部卿於壬午大興殿休養  
○十六日工部卿於壬午大興殿休養  
○十七日工部卿於壬午大興殿休養  
○十八日工部卿於壬午大興殿休養  
○十九日工部卿於壬午大興殿休養  
○二十日工部卿於壬午大興殿休養

○十七日賀嘉松平肥前守利常駿府知登  
城<sub>總</sub>神君<sub>八</sub>舟家<sub>ノ</sub>太<sub>切</sub>二<sub>字</sub>國後<sub>ノ</sub>昭  
差黃金三百枚<sub>色</sub>緒三百匹<sub>ヲ</sub>獻<sub>ス</sub>義直<sub>卿</sub>  
賴直<sub>卿</sub>賴房<sub>卿</sub>八<sub>刀</sub>服<sub>差</sub>一<sub>腰</sub>ヲ<sub>黃金</sub>三十  
枚<sub>宛</sub>神<sub>君</sub>御<sub>内</sub>意<sub>送</sub>於<sub>勝</sub>於<sub>万</sub>珍<sub>龜</sub>ノ<sub>三</sub>  
侍<sub>女</sub>并<sub>河</sub>茶<sub>局</sub>八<sub>黃</sub>金<sub>十</sub>枚<sub>綿</sub>二百<sub>宛</sub>於<sub>甚</sub>  
方<sub>八</sub>同<sub>五</sub>枚<sub>百</sub>拍<sub>惣</sub>女<sub>中</sub>八<sub>白</sub>銀<sub>三</sub>百<sub>枚</sub>  
執<sub>事</sub>上<sub>野</sub>女<sub>安</sub>藤<sub>常</sub>刀<sub>直</sub>次<sub>成</sub>瀨<sub>車</sub>人<sub>正</sub>  
并<sub>小</sub>升<sub>右</sub>近<sub>太</sub>夫<sub>直</sub>勝<sub>松</sub>平<sub>右</sub>衛<sub>門</sub>太<sub>夫</sub>  
正<sub>綱</sub>八<sub>時</sub>服<sub>五</sub>領<sub>黃</sub>金<sub>十</sub>枚<sub>宛</sub>匠<sub>師</sub>宗<sub>授</sub>後

存庄三郎 同三領 五枚 賜 利常 暇  
ヲ 其臣 奧村河内守 榮明 同姓 攝津 亦 永 福  
其 報ヲ 獻 正 辨 賜 御 遂 此 利 常 是 日 江 府  
泰 向 所 加 賀 能 登 越 仲 三 箇 國 領 知 以 其  
井 卯 章 三 玉 乃 在 其 部 餘 諸 大 名 一 流  
祭 日 江 府 御 城 經 營 也 諸 大 名 一 流  
飯 國 之 暇 日 賜 此 就 于 義 服 五 十 領 或 八 三  
十 領 白 銀 五 百 枚 或 八 三 百 枚 又 八 駿 馬 三  
〇 授 与 之 也 就 中 大 坂 兵 ヲ 集 ル 由 密 使 頻

リ ナル 故 播 劔 八 楨 劔 二 隣 ル 二 依 テ 国 主  
松 平 武 藏 守 利 隆 二 八 別 三 密 旨 ヲ 諭 サ  
レ 聊 路 次 ヲ 急 キ 飯 國 八 三 命 セ ラ ル  
〇 今日 元 桐 東 市 正 飯 坂 路 次 江 劔 土 山  
ノ 驛 二 至 リ 同 驛 二 テ 大 藏 卿 乃 正 栄 尼 二  
面 會 ス ル 必 西 女 八 市 正 カ 病 躰 経 カ ラ サ  
ル ヲ 見 テ 驚 且 鐘 銘 序 文 凶 詞 ノ 誤 ヲ 申 披  
テ 飯 坂 ノ 功 ヲ 譽 ル 處 市 正 カ 曰 既 二 此 事  
ヲ 申 開 リ 二 至 リ テ 浪 士 ヲ 集 ル ノ 聞 へ 最  
早 駿 府 二 露 頭 三 御 尋 頻 リ 二 ノ 種 々 陳 謝



セシムル処然ハ且元丹誠ヲ  
ラシメヨトノ御誕相計ルハキ難詞ヲ蒙  
リ殆ト進退爰ニ極ル三件ヲ述ルノ旨ノ  
演説又両女ハ神君ノ姻情ヲ蒙リ殊ニ  
外ニ御誕無ク首尾ヨキニ募リ此三件ハ  
全ク且元カ同神君ハ追従スハキ計畧ト  
察ニ其詞ヲ出サシメ其怒容魚ニ頭ニ途  
中ヨリ急使ヲ以テ行此趣キ定殿上定達  
市正力造意ハ由ニ述限ト云カ古  
...

○十八日大藏卿為正采尼土山ノ驛ヲ登  
尻桐市正公同日登足ニ存意ヤ行京都  
ニ至リ坂倉伊賀守ニ面談シ大佛殿造立  
ニ就テ在京中請向取計ヲ記録シ

...

○十九日 神君板倉伊賀守カニ男内膳  
 正重昌ニ参 加深溝ノ地十五百石加恩云  
 ○今日 加支丹ノ徒原主水本ル十三日放  
 逐ノ時 困越前守貞綱 カ子平内カ  
 許ニ皆ク隱シ置タル昔 露頭ニ因父子礼  
 明セラルル処 越前守カ所以ニ振又平内旧  
 友タル故 領邑ニ隱置タル昔上聞ヲ歴  
 テ貞綱カ免許ヲ蒙リ 平内ヲ改易セラル  
 抑平内カ浮田家ノ浪士 明石掃部全登カ  
 聲ニシテ 全登平内主水 任ニ各邦廣宗カ

○廿日 大藏卿局正采尼大坂ニ飯リ報メ  
 曰直ニニ大卿所ノ命ヲ蒙リ 右府ヲ憐ヌ  
 子ノ如シ 其情ヲ厚キヲ以テ 下愚ニ至テ  
 芳詞ヲ下サルト云 又市正 吾身ヲ立シカ  
 為三件ノ大ヌヲ儲テ 君ヲ廢ントスル由  
 説ケレハ 淀殿忽 神君ノ雄謀ニ陥リ大  
 野修理亮ヲ呼テ 市正三件ノ大ヌヲ述ル  
 ヌ右大臣ヲ誦イシ 己身ヲ立トス 誠ニ墮  
 上ノ甚キ也 昔ハ 惣見臨殿ノ信長公ノ姪ニ  
 ノ右府ノ母也 関東ニ下向ノ耻ヲ忍ヒ汚

名ヲ地下世得凡水速ニ且元日誅元義兵  
ヲ譽テ勝負ヲ當城ニ欲ト宣フ右大臣  
殺王大臣且元力心中起立テ終ニ大野  
終理亮ヲ行是初命以治長元末元桐カ  
權威アツテ駿府江有以對容別ナルヲ憎  
ミケルハ是ヲ策制幸計以玩桐何誅ニ兵  
ヲ譽ルニ極ム信成市五昔長門亦重成  
淀殿再七渡辺内藏人糺木村長門亦重成  
ヲ召シテ密計ヲ凝サレ兩人相西女ノ  
詞甚毛毛蟻ノハ力ラヌト雖且元ハ駿府

ニ於テ日大御所ノ密旨ヲ本号上野外ヨ  
リ聞ルヲ以テ一往其赴ヲ尋訊ニ跡且元  
力僭上ニ極リタルハタシハ忽是ヲ誅ニ  
諸侯ヲ調畧シ浪士ヲ集メ関東ヲ傾ケ玉  
ヲハシト演説ス淀殿喜悅不斜是ヨリ日  
其臣ト謀畧ニ凝シ玉フト云々  
○今日里見安房守忠義力欠国安房請取  
トシテ内希左馬外忠長本号出雲守忠朝  
松平丹波守康長希田能登守信吉西郷旅  
六郎近寛日根野織部正吉明那須大岡大

田原福原芳野平本岡本方沢亦郷等惣少  
高三十六万石ノ松後御以テ人数ヲ差遣  
カシ鑪山祖城郭ノ割崩ルニ或ハ國中ヲ鎮  
護以テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ  
諸將ノ時ニ於テ其旨命ヲ蒙ルニ是レハ

常真寛永七年  
辛酉晦日  
平年  
七十二

二〇乙

○廿二日松平肥前守利常右近衛權少將  
ニ任ス時ニ二十二歳江府在位也  
○今日早朝ニ前内大臣正二位前尾濃大  
弁平朝臣信雄入道常真天満ノ寓舎ヨリ  
登城ス是ハ昨夜子ノ刻淀殿ヨリ内書ヲ  
送ルノ故也常真爲テ宮中ニ入り執事西  
局ニ位大藏卿配以下諸局ニ見ユ時淀  
殿允右大臣殿ノ命ヲ傳テ曰市正密ニ相  
謀テ大御所ノ追従ニ西君ヲ殺セント  
スルニ至ル依之渠ヲ殿中ニ召テ殺害ス

ハシ常真翁太<sub>ル</sub>庚子<sub>未</sub>落魂ノ身ト云<sub>氏</sub>  
今日ヨリ君ノ補佐也<sub>ウ</sub>兵權ヲ掌<sub>リ</sub>玉  
ハキ昔ヨリ述<sub>ル</sub>常真大<sub>ニ</sub>驚<sub>キ</sub>市正力<sub>逆</sub>  
意其實否計<sub>リ</sub>難<sub>ク</sub>今<sub>渠</sub>ヲ誅<sub>シ</sub>大御所  
鋒揃<sub>ニ</sub>及<sub>ハ</sub>訖<sub>ル</sub>八<sub>ノ</sub>計<sub>ル</sub>ハ<sub>キ</sub>  
処<sub>テ</sub>ヤ<sub>ラ</sub>ス<sub>市</sub>正誅<sub>戮</sub>日<sub>替</sub>引<sub>ル</sub>行<sub>テ</sub>  
能<sub>ク</sub>食<sub>議</sub>ヲ疑<sub>ヒ</sub>ラ<sub>ル</sub>ハ<sub>キ</sub>欲<sub>ク</sub>淀殿此<sub>返</sub>答<sub>テ</sub>  
ヲ聞<sub>テ</sub>大野等<sub>ニ</sub>告白<sub>シ</sub>彼翁愚<sub>味</sub>也<sub>ト</sub>イ<sub>ハ</sub>ル<sub>故</sub>  
氏惣見院殿ノ息<sub>ニ</sub>シ<sub>テ</sub>諸人尚<sub>重</sub>ス<sub>ル</sub>故<sub>ニ</sub>  
此命<sub>ニ</sub>及<sub>リ</sub>処<sub>テ</sub>吾親戚ト<sub>メ</sub>難<sub>澁</sub>アル上<sub>ニ</sub>

忽害ス<sub>ハ</sub>シ然<sub>レ</sub>モ今<sub>一</sub>往<sub>理</sub>ヲ説<sub>テ</sub>服<sub>心</sub>  
アルシム<sub>ハ</sub>シト云<sub>々</sub>時<sub>ニ</sub>淀殿ノ侍女<sub>ニ</sub>  
中將ト云<sub>女</sub>常真家臣ノ娘<sub>ナル</sub>故<sub>其</sub>難<sub>ク</sub>  
ヲ告知<sub>ラ</sub>ス<sub>ハ</sub>キ<sub>為</sub>ニ<sub>啖</sub>茶<sub>ヲ</sub>拵<sub>出</sub>テ<sub>常</sub>真<sub>ニ</sub>  
ニ<sub>呈</sub>ナ<sub>カ</sub>ラ<sub>淀</sub>殿<sub>ノ</sub>命<sub>令</sub>ニ<sub>荷</sub>キ<sub>玉</sub>ハ<sub>露</sub>  
命<sub>爰</sub>ニ<sub>寃</sub>ル<sub>ハ</sub>シト私<sub>諾</sub>シ<sub>カ</sub>ハ<sub>常</sub>真<sub>偽</sub>リ  
旨<sub>シ</sub>ト<sub>欲</sub>ス<sub>ル</sub>処<sub>重</sub>テ<sub>兩</sub>局<sub>ヨ</sub>リ<sub>尚</sub>々<sub>且</sub>元  
ヲ誅<sub>シ</sub>玉<sub>イ</sub>テ<sub>是</sub>北<sub>采</sub>配<sub>アル</sub>ハ<sub>キ</sub>旨<sub>細</sub>  
傳<sub>説</sub>アリ<sub>テ</sub>レ<sub>ハ</sub>常<sub>真</sub>偽<sub>テ</sub>是<sub>ヲ</sub>落<sub>シ</sub>然<sub>ハ</sub>  
入<sub>道</sub>將<sub>師</sub>ノ<sub>任</sub>ヲ<sub>蒙</sub>リ<sub>愚</sub>蒙<sub>十</sub>カ<sub>ラ</sub>且<sub>元</sub>ヲ

戮之三軍ノ令ヲ施スハ昔ヲ領掌ニ虎  
口ヲ逃ルテ館ニ取ル家臣生駒長兵衛ヲ  
呼テ我ニ往年太湊利為ニ攻傾ラハ  
刻ニ德川殿援助也ウニ後庚子ニ石田カ  
計謀ニ組スル如又德川殿ノ慈愛ニ依  
テ死ヲ免カレ余関東ノ扶助ヲ請フ時  
ヲ領掌ニ万石今日ニ至ル右有母子共人ノ  
勸メニ隔リ市正ヲ誅ニ兵ヲ卷ニ以事  
急也市正ヲ救テ我カ難ヲ免ニ事ヲ議ス  
生駒誓忍惟人常真ヨリ市正カ方ハ急ナ

ル密事ヲ告ヘシ服心ノ臣ヲ忽差越ハキ  
旨自筆ニ一筒ヲ吞セ是ヲ得テ者大臣殿  
近士北村惣九衛門ト云フ者ハ且元ニモ  
生駒ニモ縁賂アル故是カ許ハ拵泰ニ市  
正カ方ハ達セシム爰ニ於テ市正家臣小  
島庄兵衛ニ朧取一領ト相易江易酒兩獮  
白島一羽駿府ノ土産ト拵シ是ヲ持セテ  
常真ハ遺シテハ入道觀ニテ殿中ノ企  
ヲ悉細ニ小島ニ告テ是ヲ飯ス  
今夜大野修理亮治長一挙ニ市正一族ト

平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...  
平定討... 議... 氏... 七組番頭... 八外様... 御幕下終...

○廿三日 神君上山 檢校力平家一曲檢  
翻御聽聞アリト云々  
○今日淀殿右大臣殿ヨリ大野修理亮ニ  
命シテ明後廿五日登城アリテ御直ニ駿  
府ノ返答ヲ聞シ召ス趣達セシム市正爲  
テ是ヲ諾ス常真ヲ市正ニ殿中密謀ノ漏  
ル莫ク大野渡辺木村以下知サルト云々

○廿五日片桐東市正且元今朝ノ期ニ至  
兼々取劣タル処益心身悩乱ス卜稱シ出  
仕スル夏十キ故再三右大臣殿使ヲ以テ  
殿中ニ招ルト云ハ其義十カリシカハ  
其臣其謀ノ漏レ夏ヲ惜テ大ニ憂苦ス且  
モ又殿中ヨリ軍兵ヲ吾鑑ニ發セシ素ヨ  
リ右大臣殿ニ對シ異心ナシト雖モ宜ク  
責吻ノ革カ手ニ死シヨリハ一旦勝負ヲ  
決シ自救セシト欲シ御勢ヲ集ル取ニ廻  
士共力又ハ右大臣殿謀本ノ内ニモ市正

○廿三日  
○今日  
○大  
○山  
○平  
○一  
○曲  
○林



顧盼氏方秩禄刀餘  
此族彼籠二入テ死  
對先所地此ト以  
好小終集天書  
黃如革々十二天  
レ古大五煙  
子大森中三日軍兵下  
花身共結  
燧中一歌  
土入山竟十々若再三古大五  
軍  
廿五日六日  
東市五且示今陸

○廿六日既二市正カ兵三百騎相集ル由  
大野等聞テ大ニ驚キ本丸水手筋鉄ノ兩  
門ハ元桐カ組從士是ヲ亦リ三丸四門ノ  
鎗皆市正カ預リニテ城ノ案内人数ノ多  
少悉リ且元カ胸臆ニ存ス渠兵ヲ發メ本  
丸ヲ拔ハ君ノ瑕瑾ハ論スルニ及ハス吾  
黨ノ汚名ヲ貽サシ軟夏淹留セハ震ヲ生  
スハ早クモ彼誼ヲ攻屠セントスレ共  
故殿下ノ定メ置レシ七組ノ番頭皆元桐  
カ讒鋒ニ陥ル夏ヲ憐テ今且元谷鉄ノ罪

君命ヲ待ツル衆トモ是ヨリ誅スヘシト  
云ハレ今敢且元秋毫モ君ヲ凌クノ志ヲ  
含テス君ノ社稷全キ末ヲ運ス処ニ諛  
諛頻ニ其眞實ヲ紕サレテ復テ以テ臣奮  
虚名ヲ蒙リ死ニ就ク賊臣ノ鬻來ヲ拒キ恨  
發シテトモ是賊臣ノ鬻來ヲ拒キ恨ヲ  
地下一貳貳元トモ是賊臣ノ鬻來ヲ拒キ恨  
妾如ク夫ヲ發シテトモ是賊臣ノ鬻來ヲ拒  
明ニ答ハレハ大野黨大ニ耻テ再ヒ使

未復命ヨリ君ニ捧正ト欲ム兄不義ヲ  
大朝臣殿恩ケテ殊ニ厚シ故ニ正貞隆ハ  
中野避シテ謀使士負隆ニ遺テ曰汝今  
其兄市正且カテ不義ニ使士負隆ニ遺  
名ヲ貶シテ早ニ登城シテ兄ニ代テ政  
眉簾本ノ勢ヲ力ニ彼舍弟ノ市正貞隆ハ  
沈ハ大御所怒テ君ノ指呼ニ應セ又依  
大御所怒テ君ノ指呼ニ應セ又依

○廿七日組番頭速見甲斐守時之伊東  
丹後守長實青木民部少輔一重野々村伊  
豫舟雅春中島式部女補一氏姫田圖書外  
勝喜真野豊後守頼包昏議以甲斐守時之  
市正館大寺外本於君奉對兵日當時養平  
ノ日城内所通於君奉對兵日當時養平  
是臣以城内所通於君奉對兵日當時養平  
獻之可也且元カ日全ク對捍ノ心ナシ  
疾ヲ嬰リ登城以ルマカ日全ク對捍ノ心ナシ  
召テ死ヲ賜ヒル由其告アリ臣ノ道

節ヲ遺ス大守シテ愛護市正カ臣ノ  
董以面々大守シテ愛護市正カ臣ノ  
ノ命ヲ矯テ早ク黨本九手第鉄臣  
具命ヲ矯テ早ク黨本九手第鉄臣  
其命ヲ矯テ早ク黨本九手第鉄臣  
向テ大銃ヲ發ル也敵龍進稱欲君由門  
トテ大銃ヲ發ル也敵龍進稱欲君由門  
ハハテ大銃ヲ發ル也敵龍進稱欲君由門  
ハハテ大銃ヲ發ル也敵龍進稱欲君由門

君ノ為ニ跡ヲ厥心ハ此ヲ及下雖其氣ヲ  
亂ルヲ以テ送臣ノ名ヲ得ルモ其  
必頻ニ攻ラズニ金作兄ノ命落魂ノ士ヲ募  
吾宅ヲ兵ヲ集ルハ故ニ其害ヲ避ク為  
也スルニ未ダ會ハズ是君ノ敵對人志  
不駿有テ大御所ノ欲也シテ或ハ  
新有テ大御所ノ欲也シテ或ハ  
八州ノ由海陸靜諭知切弔止ム  
八州ノ由海陸靜諭知切弔止ム

得スノ三作ヲ述ル最モ其夏ノ難キハ嬰  
兒ト云フ氏知ハシ第一ハ君岡東迎未  
シ玉公ノ威望大ニ衰フハ二不當城  
ヲ避テ他邦ニ遷リ玉亦ニ夏是又成ニ難  
寺所也唯母公淀殿岡東下向ヲ願フ時ハ  
西御所ノ御旨ニ協ハシ其許容ヲ上テ後  
殿館ヲ江府田川ノ邊ニ望ニ彼邊峻經丘  
陵亦テハ早瀬ノ所ヲ見立是ヲ賜リテ四  
方ニ惶ヲ構ハ土地ノ嶮シキヲ易クシ其  
早ヲ高クシ人カヲ尽シ一兩年ヲ歷ハシ  
其上ニテ殿閣誠工ヲ尽シ遂ルは一兩年

夫過可也 大御所ノ壽齡其經營ノ功畢  
ル迄 薨御ノ方 小君ノ用運西至ラセ玉フ  
計儀 臣ノ力若先ナシ 小爲言ヲ構人  
淀殿 病惱失漸ニ以長途ノ旅行 協イ難ニ  
隨分 療養切ヲ積ルテ 快然ノ期速ニ出  
輿 伊心人位ナ梅沙年月ヲ送リ 大御所  
晩年 十北其薨逝 臣ノ欲又是臣ノ忠  
誠ニ有ル也 且庚子以來 臣力籌束ニ依テ  
世三君ヲ周將ト稱ス 大御所ノ明知ト  
云トモ 是ヲ信シ玉フ 實ニ當城奈海内無  
...

双ノ名城ニ御座住 且故殿下 神君重恩ノ  
大名 多キヲ以テ 大御所 歴年當家ヲ伺  
上 測リ 君ノ威徳ヲ失ハシメト 久然ニ  
淀殿 臣ノ駿府ニ近從ニ立君ニ 周將ノ名  
ヲ被ラセ 此由 憤ル玉七 刺ハ四ヶ年以  
前 大御所 君ニ對顔ノ節 其聞ハ玉フト  
違テ 敵知ナラセラル 驚キ 在世ノ中ニ 當家  
又亡ニシテ 趣 薨ニ起リ 復急ニ 欲ルノ所  
以ニシテ 大佛殿 鐘銘 難向ニ至リ 當家ヨ  
リ 兵ヲ卷サセニ 謀畧ニシテ 淀殿 是レヲ

知覺之玉が以て撤去臣に敵死日賜也  
小人是偏大拒功不率命日頼以分  
時也怨之當城身退也小者分大野黨其弊  
三乘之藁上討之小者爰立於耻ヲ泉下  
貽才伐復日歎伴討手束多俗潔白ニ  
戰之ヲ一放爰能前殺也之其欲以此外  
瀆公其詞十之十之八以速見カ曰然ラハ  
大野卜算子應通之領地上退散了火余キ  
歎市正笑ヲ曰臣何志以是下不言ヲ拒  
其嫡男出雲并高俊日時之ヲ渡ス甲斐并

甚且元々船倉深ク忠貞厚ニ感激ニ高俊  
ヲ嚮入飯所殿中ニ至カ市正カ異心ナキ  
實ヲ悉曲ニ織田有乐齋大野道大齋同終  
理亮同主馬次渡辺内藏次林村長於等  
列席長出テ涼達以淀殿右大臣殿前ニ召  
之初テ且元カ滔上ニ非ル莫ク察シ玉フ  
小雖且元一家亦者領地正退去セシ命ハ  
未旨淀殿大野修理亮ヲ以テ命セラレ且  
市正ヨリ質ヲ出スニ耻テ有乐齋修理亮  
此儀初卷評儀タルニ依テ西人モ各其子

九所桐乃許送り質亦セシト相儀不  
木村長門守重成獨り申テ曰市正當城退  
本に後公駿有月以命ヲ下ス八ニ災ル時  
小必定合戦不節敵ヲ測ト成テ君ノ御為  
宜ニカラス深力心ヲ疾ニ退去ヲラニメ  
兵恩信ヲ以テ立中近遠皆有兵大野黨ニ  
玄流儀尤ハ儀武定殿右大権殿正此儀信  
妻ニ及リ処終ハ少キイカニ君ノ権君ヲ  
出雲守ニ賜又今キ者命也ラニ災ル時  
今日速見甲斐守時之再ヒ命ヲ蒙ル所

桐力詔ニ至リテ且元申述ル趣詳ニ聞届  
殊ニ貨子ヲ出ス莫神妙也妾リニ兵ヲ集  
ルノ由ヲ聞テ詠トスル処今其陳謝ヲ  
聞テ疑ヲ散ス唯穩使ニ退去ニ領地茂木  
ニ整居ヌハニ退少刻犯ス莫ナカルハニ  
トテ出雲守ヲ飯サレ君密ニ御養ノ姫君  
出雲守正嫁シ玉フヘキ由ヲ傳達ス且元  
弥弟服ニ速カニ退去スハニト雖願ル処  
ノ器物并貢税ノ帳面及大佛造立殿閣經  
營ノ金銀出納ノ帳面等迄悉ク改メ畢テ

是月獻罷後退去以於寺者月卷ノ筆  
木器無非負就或彌因以大和勤立  
待着跡ノ整具ニ更否ノ下以  
出定并王秋ノ王ノ八極由成轉重ノ具示  
直ニ出雲并等如十ノ以  
三楚舞不ノ心更心便外對對十ノ秋  
備ニ疑也如和歌知更外對對十ノ秋  
年ノ中ノ日御意心更心便外對對十ノ秋  
秋武節ノ出ノ更心便外對對十ノ秋  
秋武節ノ出ノ更心便外對對十ノ秋  
秋武節ノ出ノ更心便外對對十ノ秋

○廿八日 神君當世一日ヨリ 齋ヲ患ヘ  
王ノ外今日 御快然ニ依テ 白書院 出御  
御請代ノ大名 御近臣并賜ス  
○今日元桐東市正カ 飛脚駿府ニ到來也  
大坂正飯着以後 淀殿開東下向ノ 度沙汰  
セシムル外 西君怒リ甚ク 侍者其弊ヲ伺  
ヒ 諺聞頻リノ 誅也ヲ此ノ 入キ密策ノ趣告  
知ラスル者 尸ル由ヲ記ス 此趣本尋上野  
女披露ス 神君御憤不斜ト云々  
○今日大坂ニ於ハ 市正 今明日ノ間ニ 器



物懐面悉少老臣ヲ以テ獻<sub>レ</sub>右大臣殿百  
り皆瀟<sub>レ</sub>人印章ヲ受<sub>レ</sub>此且二之九<sub>ニ</sub>アル也  
味狼米大小ノ鳥銳玉藥以下身差出<sub>レ</sub>織  
田有衆齋大野修理亮請取り且退<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>刻  
ハ貸子ヲ渡<sub>レ</sub>心<sub>ニ</sub>也旨申送<sub>レ</sub>且元固<sub>レ</sub>辭  
於下雖兩人是飛逸<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>其上城外吹  
田川邊追<sub>レ</sub>七組衛護<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>呼<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>セラル<sub>レ</sub>ト  
演達ス  
○廿九日  
○廿八日

○廿九日駿府ノ獄舎ニ於テ邪<sub>レ</sub>癩ノ徒清  
安同獄ニアル眾人兩人ヲ宗門ニ勸<sub>レ</sub>入  
ル依<sub>レ</sub>之清安カ十指ヲ断<sub>レ</sub>テ額ニ十文字ノ  
燒印ヲナシテ放逐セラ<sub>レ</sub>ル又外科吉庵其  
業未<sub>レ</sub>熟ニメ妄ニ威言<sub>レ</sub>ノ衆ヲ惑<sub>レ</sub>シ嚮ニ三  
好丹後守カ癩疽ヲ平治スハキ旨監<sub>レ</sub>ノ約  
メ死亡ナシシムル夏露顯<sub>レ</sub>シ刑策ヲ附江  
府ニ送り市中ヲ亘<sub>レ</sub>シ夫ヨリ中仙道ヲ經  
テ京都大坂ノ市中ヲ亘<sub>レ</sub>シ其上罪スハキ  
旨彦坂九兵衛光正町駿府ニ命セラル



